鹿屋市小塚公園慰霊塔

会報
特攻
令和５年８月

第１４６号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　SGネクストHD（株）

目　次

暑中お見舞い申し上げます・・・

署中お見舞い申し上げます

公益社団法人隊友会
会　長　折木良一
理事長　岩﨑　茂
常務理事　徳地秀士
常務理事　岩田清文
常務理事　山村　浩
事務局長　藤井貞文

公益財団法人偕行社
会　長　志摩　篤
副会長　深山明敏
相談役　熊谷　猛
相談役　森　勉
理事長　火箱芳文
副理事長　岩田清文
専務理事　内田益次郎
事務局長　山越孝雄

公益財団法人水交会
会　長　杉本正彦
副会長　佐賀幾雄
理事長　河野克俊
専務理事　村川　豊
事務局長　徳丸伸一

航空自衛隊退職者団体
つばさ会
会　長　齊藤治和
副会長　杉山良行
副会長　片山隆仁
副会長　福永充史
副会長　藤田信之
副会長　谷井修平
専務理事　小城真一

公益財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
理事長　山下輝男
専務理事　伊藤　隆
常務理事　國澤輝生

東郷神社
宮　司　福田　勉

東郷会
会　長　伊藤康成
副会長兼
理事長　田内　浩
編集長　伊藤和雄
事務局長　足立晴夫

一般社団法人日本郷友連盟
会　長　森　勉
副会長　廣瀬清一
専務理事　越智通隆
（常務理事　冨田　稔
理　事　袴田忠夫
理　事　佐藤誠喜

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
会　長　藤田幸生
理事長　岩﨑　茂
副理事長　岡部俊哉
専務理事兼
事務局長　石井光政
理　事　臼田智子
鮒田英一
大穂園井
久納雄二
監　事　福江広明
阿部軍喜
羽渕徹也

「巻頭言」

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　岩﨑　茂

今年もまた暑い夏がやってきた。今年は、大東亜戦争終結後78年になる。そして10月には、関行男隊長が率いた最初の特別攻撃隊である敷島隊が任務を果たし散華されて79年となる。我が国では、戦争を含む多くの経験から得ることが出来たいろいろな教訓が確りと生かされ、幸運にも戦争のない時代が長く続いている。世界にも類を見ない大変素晴らしい国である。しかし、私は、特に最近では、夏が来るたびに私たちは、このような先人の方々のご功績・ご偉業を確りと引き継ぎ、次世代に伝えているのだろうか？と疑問を抱くときがある。

安倍晋三元総理大臣の銅像

先日、機会があって久々に台湾を訪問した。いろいろな方々との意見交換や講演が主目的であったが、これまで訪問したことがなかった高雄市に一晩宿泊する機会を得た。高雄市には、私が最も尊敬する安倍晋三元総理大臣の等身大の銅像が、昨年の９月に「紅毛港保安堂」の廟（びょう）内に建立された。この銅像は、安倍元総理の日台の親善を精力的に推進した功績を称えるため、現地の有志の方々の寄付で行われた。この「保安堂」は、終戦後、紅毛湾の漁師が出漁した際に引き上げた網に一体のご遺体（頭蓋骨）があり、これを祀る為に建設された廟である。このご遺体は、大東亜戦争でバシー海峡に沈んだ旧日本国海軍の第38号哨戒艇「蓬（よもぎ）号」の乗組員のものであり、以降、「蓬号」艦長である高田大尉（熊本県出身）を含め１４５柱が祀られている廟である。

また、台南市には「飛虎将軍廟」がある。昭和19年10月12日、台南市上空で不運にも米軍機との空中戦で被弾し、墜落の際に集落を避けるため最後まで操縦し、墜落死したゼロ戦のパイロット杉浦茂峰兵曹長（茨城県出身、戦死後少尉昇進）が祀られている。この廟では今でも朝夕に「君が代」が、午後には「海行かば」が祝詞として流されている。２０１６年には杉浦少尉の神像は一度、茨城県水戸市に里帰りし、茨城縣護國神社で慰霊祭が行われた。

この様なことを目の当たりにし、他国の軍人を今に至るまで営々と祀ってくれている事に頭が下がる。私たちが学ぶべきところが多々ある。

私は、自衛隊を退官した後に「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」に入会し、いろいろな活動に携わっている。私たちの努力不足もあり、残念ながら我が特攻顕彰会の会員の減少に歯止めがかからない。大変憂慮すべき事態であると感じている。私たちの会員を拡大することが即ち、一人でも多くの方々に特攻隊で散華された御英霊の御遺志を後世に伝えることに直結する。今後、会員の皆様方にいろいろなお知恵を拝借するとともに、理事会等でも各種検討を進め、会勢拡大に尽力する所存である。何卒、この機関誌をご愛読の皆様、ホームページをご覧頂いてる皆様、そして会員の皆様方のこれまで以上の特攻隊戦没者慰霊顕彰会に対しますご支援・ご協力をお願い申し上げます。

今、私たちが平和や繁栄を享受できているのは、若い特攻隊の隊員のお陰です。改めてご英霊に対し深甚なる感謝を申し上げますとともに心安らかならんことをご祈念申し上げます。

『高知県特攻勇士の像』除幕式

編集長　金子　敬志

令和５年４月30日（日）、高知縣護國神社に特攻勇士の像が奉納されました。

特攻勇士之像の奉納は、この像で22体目になります。

この特攻像の除幕式に藤田幸生会長とともに参列させて頂きましたので報告します。

高知縣護國神社は高知市南東部に位置する五台山の山麓にあります。社殿はやや上がった場所にあり、そこに上がる石段の登り口の左側に特攻像は安置されました。

除幕式は、建立実行委員長の中西哲前参議院議員他約30名が参列して斎行されました。

来賓として、当顕彰会から藤田幸生会長、他に内閣総理大臣補佐官衆議院議員中谷元氏らが参列しました。

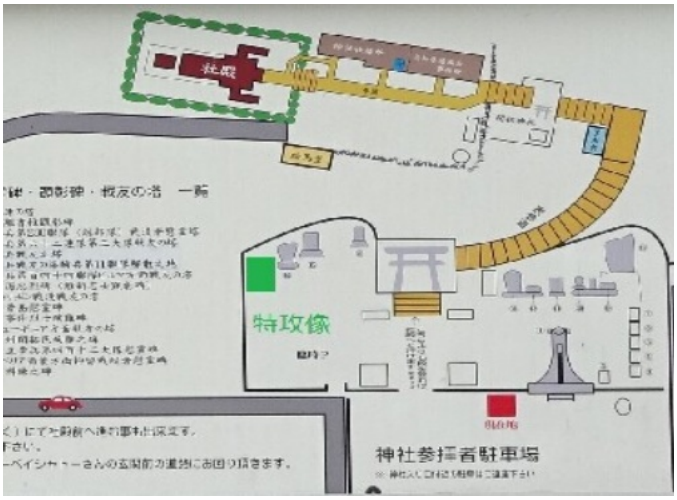
式次第は次の通りです。

一　開式の言葉
一　国歌斉唱
一　神事
・修祓
・一拝
・降神の儀
・献饋
・祝詞奏上
・除幕の儀
・玉串奉奏
・撤饌
・昇神の儀
・一拝
一、建立実行委員長挨拶　中西　哲
一、来賓祝辞
・公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会
会長　藤田　幸生
・高知県護国神社　宮司　別役　重具
・内閣総理大臣補佐官　衆議院議員
中谷　元
一　祝電披露
一　海行かば斉唱
一　閉式の辞

除幕の儀には藤田会長も参加しました。

予定通りに式典が終了後、神社社務所において高知県特攻勇士顕彰奉賛会臨時総会が開催され、来年の予定として10月第４日曜日に慰霊祭を斎行することが決議されました。

高知縣護國神社



高知縣護國神社境内図（緑：特攻像）

高知縣県護國神社について

先に記したように五台山の山麓に鎮座しています。

明治元年、土佐藩主山内豊範が藩校高知致道館で、戊辰戦争で戦没した土佐藩士の招魂祭を行い、その御霊をお祭りするために明治２年に現在の地に大島岬神社が建社され、明治８年に招魂社、昭和14年に高知縣護國神社に改称されました。

戦後、社号を大島岬神社と改称しましたが、崇敬者多数の要望により昭和34年に元の高知縣護國神社に戻りました。

ご祭神は、高知県出身並びに、縁故ある戦没者４万１千余柱、武市半平太、坂本竜馬、中岡慎太郎、吉村寅太郎らの明治維新の志士も祀られています。

五台山は桜やツツジの名所だそうで、山麓には四国霊場第31番札所の竹林寺（よさこい節に登場するお坊さんが修行していたお寺）や、日本で初めて植物に学名をつけた世界的植物学者，牧野富太郎博士を記念して作られた県立牧野植物園や記念館があります。

ＮＨＫの朝ドラの主人公のモデルが牧野富太郎博士であるためか、五台山を訪れる観光客が増えているそうです。

五台山への登り口から護国神社へは約５００ｍです。お近くにお出での際は、高知縣護國神社にもご参拝下さい。

高知県特攻勇士の像

除幕の様子、左側奥に藤田会長

戦艦「大和」戦没七十八年追悼式に参列して

評議員　及川　昌彦

令和五年四月七日金曜10時に開催された追悼式に理事長代理として及川昌彦評議員、原知崇評議員が参列しました。

広島での開催「Ｇ７サミット」を来月に控え、広島全体が戒厳令下のような物々しい警備体制でした。

呉の旧海軍墓地の「戦艦大和戦死者之碑」前にて戦艦大和会主催で、降りしきる雨の中、10時開始、この日は海上自衛隊教育隊入隊式等の諸行事のため、現役の海上自衛隊員の派遣が出来なかったので、急遽、原評議員が軍艦旗掲揚を手伝うことになりました。黙祷の後、小笠原臣也戦艦大和会会長による式辞、元呉市長でもある小笠原会長は「次の世代に大和を伝承することを通じて、世界平和維持に貢献することが英霊に応える道と確信している」と式辞を読みました。追悼の辞、来賓紹介、献花奉納、軍艦旗降納、閉会の辞の次第で開催されました。

主な参列者として戸高一成大和ミュージアム館長、海上自衛隊呉総監代理、海上保安学校長、呉市長、呉水交会副会長、広島隊友会会長、呉商工会議所会頭、呉市議会議長代理等２００名でした。この慰霊祭の対象は天一号作戦で散華された戦艦大和の英霊と大和の護衛にあった第二水雷戦隊矢矧・磯風・濱風・霞・朝霜・冬月・涼月及び雪風で散華された英霊、レイテ沖海戦で戦死された大和の乗組員、大和建造にあたり殉職された呉海軍工廠の工員の方々です。

出撃時の大和乗組員は３３３２名、そのうちの生還者は２７６名で、現時点でご存命の方は２名だけとなりました。

戦艦大和戦死者之碑

参列代表者による記念撮影

軍艦旗掲揚

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式

編集長　金子　敬志

令和５年４月８日（土）鹿屋市小塚公園慰霊塔前広場に於いて「令和５年度旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」が執り行われました。

この追悼式に参列させて頂きましたので、概要と所見を述べます。

一　追悼式の概要

追悼式は、小塚公園内にある「特攻隊戦没者慰霊塔前」に於いて10時30分から執り行われました。式次第は次の通りです。

1　開式のことば
2　一同拝礼
3　国旗掲揚
4　国歌斉唱
5　追悼飛行
6　式辞
7　追悼のことば
8　献花
9　儀仗隊弔銃
10　式電披露
11　平和メッセージの朗読
12　国旗降納
13　一同礼拝
14　閉式のことば

当日は、やや風が強いものの晴れ渡った青空の下、追悼式は粛々と斎行され、やや予定を超えた11時40分頃、滞りなく終了しました。

二　所見

まだコロナ禍が完全に沈静したわけでは無いため、昨年と同様の規模を縮小しての開催との事で、ご遺族47家族１１８名を含め、約２５０名が参加しました。昨年の27家族71名約２００名から増加しているが、これでも例年より少ないの事でした。昨年参列させて頂いた時も、慰霊に対する想いの強さを感じました。

鹿屋市が主催し、追悼飛行、国旗掲揚・降納や儀仗隊などは海上自衛隊第一航空群が全面的に支援する、地元自治体が主体になり公的機関が支援する形の追悼式は、今後とも継続して斎行されるものと思いました。

平和メッセージの朗読

参列者による献花

慰霊塔近傍の特攻関連遺跡・施設

鹿屋市は九州最大の海軍航空基地であった海軍鹿屋航空基地がありました。

そして、大東亜戦争末期、多数の特攻機が鹿屋航空基地から出撃しています。

その為、市内には特攻関連の遺跡が多数現存しています。

その中から、小塚公園慰霊塔に近い二つを紹介します。

１　桜花の碑

鹿屋航空基地からは多数の神雷部隊桜花攻撃隊が出撃しました。

桜花の碑

神雷部隊の司令部や隊員の宿舎は、基地に対する空襲を警戒して、基地から離れた旧野里国民学校に設けられました。

現在、それを記念して「桜花の碑」が建立されています。

小塚公園から約２キロ弱、西原バイパスを南へ下って２つ目の信号を右折して約５００ｍ、朝日神社の隣です。

「桜花の碑」の揮毫は、当時、海軍報道班員であった作家の山岡荘八氏です。

隣に同じく山岡荘八氏の文章による「建碑由来」が安置されています。

建碑由来

２　海上自衛隊鹿屋航空基地資料館

観光スポットの一つとして鹿屋市のホームページにも紹介されています。小塚公園からは約１．５キロと近距離です。

この資料館は、旧海軍航空隊の歴史と、戦後の海上自衛隊航空部隊としての歴史を伝えるためという二つの目的のため昭和47年に開設されたもので、昭和11年に海軍鹿屋航空基地として開隊して以来、現在の海上自衛隊鹿屋航空基地に至るまでの豊富な史料が展示されています。

館内は１階が海上自衛隊に関する資料が、２階に海軍時代の資料が展示されています。

海軍時代の資料の中に、特攻隊員に関する資料が多数あります。

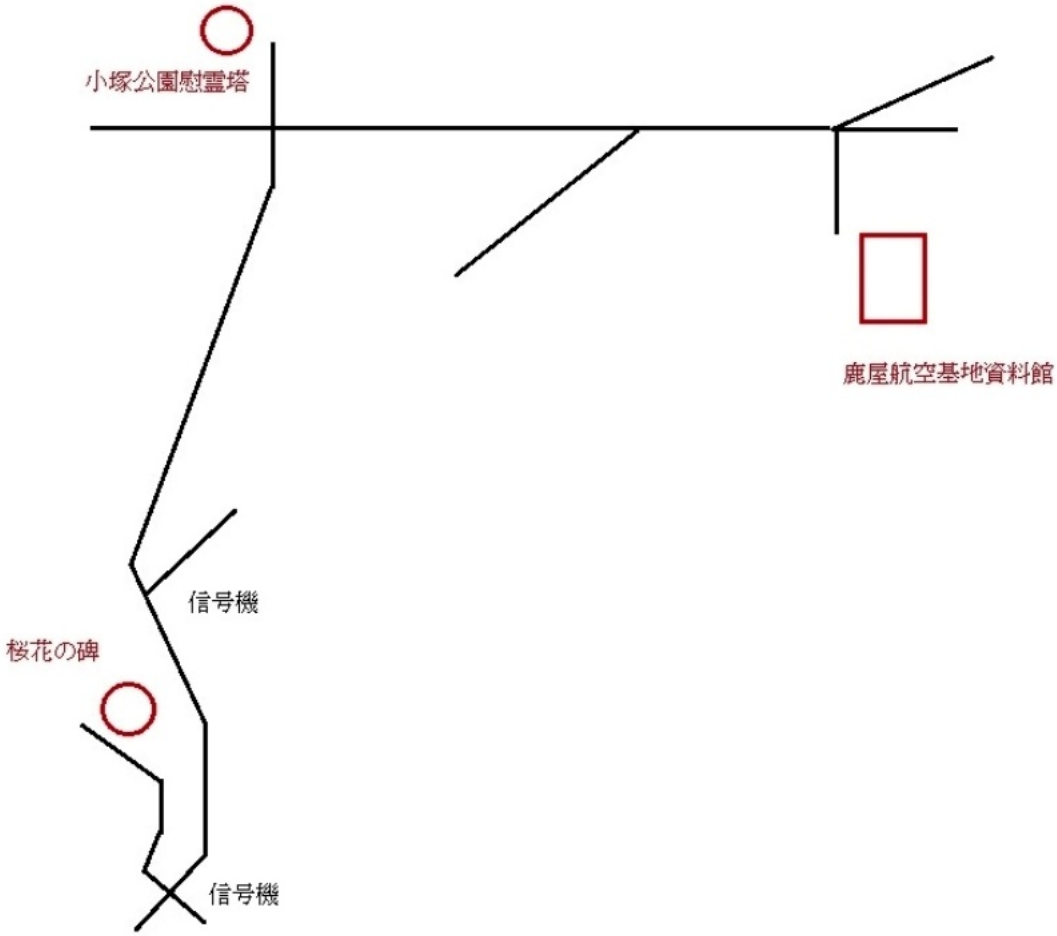
遺影や遺書等も展示されていますが、遺書等は時々入れ替えされている様です。

同じ２階には、平成４年に鹿児島県の錦江湾と吹上浜の海底から引き上げられた２機の零戦を合体させて１機の機体として復元された零式艦上戦闘機52型が展示されています。

屋外には、世界に１機のみ現存する２式大艇の他、海上自衛隊が使用した航空機が多数展示されています。

開館時間は９時から17時、休館日は12月29日から１月３日で入館料は無料です。

鹿屋航空基地資料館



第64回出水市特攻碑慰霊祭祭に参列して

評議員　及川　昌彦

令和五年四月十六日日曜日に開催された第64回出水市特攻碑慰霊祭に石井光政事務局長と参列しました。

この３年はコロナ禍のため関係者のみでの慰霊祭を実施されていましたが、今年は４年ぶりの一般公開で参列者は１４８名でした。この４年で戦友の参列が皆無となり御遺族も６名でした。そのため顕彰会からの参加２名（石井事務局長・及川）も来賓席でなく遺族・元隊員席に案内されました。

11時に陸上自衛隊国分駐屯地と出水市消防団の儀仗隊と音楽隊による国旗及び軍艦旗掲揚から開式し黙祷の後、碑への献花、椎木伸一市長による慰霊のことば、陸上自衛隊国分駐屯地儀仗隊の捧銃、音楽隊による海ゆかばの献奏、参列者全員による献花、電報の披露、音楽隊記念演奏「轟沈」「ラバウル海軍航空隊」「軍艦行進曲」「誰か故郷を思わざる」「勇敢なる水兵」最後に全員による同期の桜を合唱し、軍艦旗降下で閉式となりました。主な参列者としては藤原直哉海上自衛隊第一航空群司令、稲﨑精一郎鹿児島地方協力本部長、山脇仁一陸上自衛隊川内駐屯地司令、上新秀人国分駐屯地十二普通科連隊第二中隊長重水義也、鹿児島水交会会長、兒玉健二郎鹿児島隊友会副会長でした。来年は前夜祭も開催予定とのことでした。

慰霊祭の会場

慰霊碑「雲こそわが墓標」

万世特攻慰霊碑第五十二回慰霊祭に参列して

理事　福江　広明

一　慰霊祭の概要

令和五年四月二十三日（日）、「万世（ばんせい）特攻慰霊碑第五十二回慰霊祭」（以下「慰霊祭」）が、鹿児島県南さつま市加世田高橋１９５５―３に建立（昭和47年５月）されている万世特攻碑「よろずよに」の前において、万世特攻慰霊碑奉賛会主催により斎行された。

万世特攻慰霊碑

万世特攻基地は、日本三大砂丘の一つに数えられる吹上浜（ふきあげはま：薩摩半島西岸の砂丘海岸）に、昭和19年末、陸軍最後の特攻基地として建設された。基地内の万世飛行場からは、昭和20年３月から６月にかけて特別攻撃隊・振武隊、66及び55各戦隊等の計２０１名（17歳の少年飛行兵を含む）が、祖国防衛のために沖縄方面に出撃し散華されている。

今回の慰霊祭は、雲一つない快晴の下、平成５年に開館した万世特攻平和祈念館に隣接する万世特攻慰霊碑前において、４年ぶりに通常の開催要領で10時半から執り行われた。参列者は事前に配布された出席者名簿によると、全国各地から旧隊員１名と38名の遺族をはじめ一般参列者及び万世特攻慰霊碑奉賛会関係者等、約２００名であった。慰霊祭の式次第は次のとおり。

・遺族・旧隊員の紹介

1　開式のことば　奉賛会副会長
2　国旗掲揚
3　黙祷
4　追悼のことば　奉賛会会長
5　慰霊のことば　遺族代表
6　慰霊の詩　旧隊員
7　祭電披露
8　献詠
9　献花　参列者全員
10　献奏
11　若者の誓い　若者代表
12　合唱
13　国旗降納
14　閉式のことば　奉賛会副会長

なお、例年実施されていた海上自衛隊鹿屋航空基地所属の航空機による慰霊飛行は公務多忙のために中止、また陸上自衛隊国分駐屯地の音楽隊による献奏も事前収録されたものであった。

「万世特攻平和祈念館」（平成５年５月開館）

黙祷終了後、万世特攻慰霊碑奉賛会の本坊輝雄会長からは、収まりを見せるコロナ禍、ウクライナ侵攻の長期化及びスーダン内戦等に触れた上で、万世飛行場を出撃し尊い命を捧げた特攻隊員の崇高な精神と使命感等を後世に語り継ぎ、平和社会を築いていく旨の追悼がなされた。

「慰霊のことば」は、第72振武隊の一員

旧隊員代表　上野辰熊氏

として旧陸軍99式襲撃機に搭乗し昭和20年５月27日に沖縄南部海面で散華された高橋峯好伍長（神奈川県出身）の姪にあたる高徳えりこ氏が遺族代表として述べられた。17歳で英霊となった叔父の写真を眼にした以降、特攻史の語部となり、その史実を後世に伝えることが生きがいであると自らの心情を話された。続けて、叔父への深い思いで綴られた自作の鎮魂歌を披露された。その歌声はまさにレクイエムにふさわしく、胸に迫るものがあった。

続く、旧隊員代表で、今回唯一の旧隊員出席者である飛行第66戦隊（操縦）の上野辰熊氏は、今年95歳とは思えぬほど、かくしゃくとされていた。背筋がしっかり伸びた不動の姿勢で、昭和18年から終戦まで、自らが経験した飛行隊の編成、戦況の変化、沖縄戦への突入等を時系列で簡明に語られ、英霊に向けて日本国に加護あらんと結ばれたのが印象に残った。

祭電披露に引き続き、昨年は事前奉呈であった詩吟朗詠錦城会加世田道場による「英霊南に還る」が献詠された後、陸自国分駐屯地・音楽隊の事前収録による「国の鎮め」と「海ゆかば」が流れる中、参列者全員による献花が行われた。

参列者による献花

今年の「若者の誓い」は、南さつま市立金峰学年９年生（南さつま市で２つの小学校と１つの中学校が統合して今年４月に開校した義務教育学校）の小辻美咲さんによって読まれた。地元が大戦時に米軍の爆撃で被害や犠牲を経験していることを学ぶことで、現在の平和な暮らしにあらためて感謝したいとの思いが表現されており、若年世代による慰霊継承の気持ちを実感させられた。

式次第に記載されていた「合唱」については、沈静化したとはいえコロナ感染予防の観点から中止され、11時45分の閉式となった。

二　所見

以前、他の慰霊祭に参列した際の所見に次のような内容を記したことがある。

『大東亜戦争における戦没者のご遺族及び関係者が高齢化するとともに、我が国において少子化、就労人口の減少といった社会変化が加速化する近年、戦没者の慰霊顕彰という行為を組織的に、体系的に、継承することが困難な情勢になって久しい。こうした情勢変化を受けて、戦没者慰霊について我が国全体が大きな転換点を迎えていることを多くの方が承知している。しかし、現実は深刻で、将来的に戦没者慰霊に関わる諸行事及び各地

に所在する慰霊顕彰施設が、急速に衰退していくおそれがある。』

しかし、この万世特攻慰霊祭に関しては先の所感は全く的外れであったようだ。万世特攻慰霊にかかる行事のための体制及び運営は、南さつま市の行政組織等を中心した自治体が主体であり、確立している感を強く受けた次第である。

万世特攻慰霊碑奉賛会は、会長に南さつま市長、副会長には鹿児島県議会議員及び南さつま市議会議長が就き、理事については多くの各種団体の首長等によって構成される。さらに来賓者枠以外の参列者の中には、県立・市立の高校・中学・小学校の校長等に加え、市役所の部課長等がおられる。地域行政等に従事及び関与する多く組織関係者が参画されているからこそ、例年まとまった規模の遺族及び一般参列者がこの慰霊の場に参集されるのだろう。

これは、県下に特攻基地が点在する鹿児島の地域特性でもあるのかもしれない。それでもこれだけの体制を長きにわたり維持するのは相当な努力がなければできないことだ。体制維持という点では、慰霊碑「よろずよに」の建立、並びに万世平和祈念館の建設に尽力された故・苗村七郎氏（飛行第66戦隊所属の操縦者：２０１２年没）の英霊に対する慰霊顕彰の意志がしっかり受け継がれているからでもあるだろう。

私はこれまで世代を問わず先述の戦没者慰霊顕彰の先行き不安について警鐘を鳴らし続けるだけではなく、とりわけ十代の就学児童に慰霊顕彰の行為を継承させていくことも重要だと言ってきた。当地の慰霊祭では、「若者の誓い」という形で児童が特攻の慰霊のみならず平和の享受について朗読されていることに感心させられた。若い世代への慰霊顕彰の継承とともに、学校教育の中で我が国が過去関与した戦争・紛争に関する正しい史実を、児童に学ばせ、常識に基づく歴史観を育ませようとする教育行政の一環ではないだろうか。だからこそ、先述したように多くの教育現場の管理者が参列されているのだと思う。

若き世代による慰霊顕彰のスピーチというと、平成30年11月に参列した「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式」を思い出す。山口県周南市大津島で毎年行われる「平和の島スピーチコンテスト」で最優秀に選ばれた中学生が、追悼式にも招かれ、あらためて行ったスピーチがとても印象に残っている。

今後は、こうしたコンテストをはじめとする各種イベント等を通じて、慰霊顕彰の志を伝承していく若き世代が一人でも増えていく工夫を、我々戦後世代の大人達が行うこともまた大切なことだと痛感した。

「万世特攻碑「よろずよに」の右にある「萬世陸軍基地戦没者・殉職者慰霊之碑」

沖縄県護国神社・第65回春季例大祭と「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭参列報告

評議員　髙松　真希

青空が広がる令和５年４月23日（日）に、沖縄縣護國神社において「第65回春季例大祭」と「あゝ特攻勇士之像慰霊祭」が斎行され、これに合わせて「岡出とよ子様の講演会（特攻兵士魂の叫び）」が行われ、石井専務理事と共に参列しましたので報告します。

コロナが収束の兆しを見せ、多くの方が参列されましたが、この直前に宮古島で発生した陸上自衛隊のヘリ墜落事故の影響で、自衛隊関係者の姿がほとんど無かったのは寂しい限りでした。第65回春季例大祭は神社社殿にて13時～14時の間、約１２０名の参列者を得て、粛々と斎行されました。

その後、場所を神社内のホールに移して、岡出とよ子様（三重県）の講演会「特攻兵士魂の叫び」を拝聴しました。

あゝ特攻勇士の像

岡出様のご両親は昭和18年から、三重県伊勢市にて出撃前の特攻隊員のための寮を営んでおられました。岡出様は当時５歳で、寮で毎晩のように繰り返されていた宴と、その翌朝特攻に向かう兵士の姿を鮮明に記憶されており、その時の想い出と、亡くなった兵士への思いを切々と語られる姿に感動しました。

この時に出撃前の隊員が短冊に綴った辞世の句34首は沖縄県護国神社に奉納されており、今回私たちは岡出様の貴重な語りと共に、その短冊をスクリーンと複製展示にて拝見しました。参列者50名（満席）

なお、岡部とよ子様へのインタビューが会報１４１号に４ページに渡り詳しく掲載されています。ぜひご覧ください。

こののち、「あゝ特攻」勇士之像の前に場所を移して、15時半から「あゝ特攻勇士の像」慰霊祭が斎行されました。参列者は30名。黙祷、国歌斉唱、修祓之儀、降神之儀、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、撤饌、昇神之儀と済々活厳粛に進み、最後に加治順人宮司がご挨拶をして式は終了しました。

加治宮司はご挨拶で、次のように述べられました。「コロナ禍で慰霊祭ができない状態が続きましたが、今回やっと参列者を交え御奉仕ができました。特攻勇士之像のお顔を拝見し御霊をお迎え、お送りしていますが、にこっと安堵された気がします。特攻隊員や戦没者は、平和な時代を望んで戦いました。その思いを受け継いで平和な世の中を作るのが私達の使命です。特攻隊員の思いを皆で受け継いでいきましょう。」

コロナ禍を経て今年は慰霊祭の規模を拡大できたことに、参列された方々も胸を撫で下ろしたようでした。

沖縄の青い海は美しいだけではなく、そこを死に場所にしなければならなかった沢山の人々の思いも湛えて今日の穏やかな波を形成しているように思います。

戦争を語り継ぎ、顕彰し、少しでも多くの方の心に留めていただくことで、未来は変わっていくのではないでしょうか。そのためにも、やはり慰霊祭を継続していくことは不可欠だとの気持ちを新たにした慰霊祭でした。

加治宮司ご挨拶

昭和天皇御生誕百二十二年祭 第三十二回秋田県特別攻撃隊招魂祭

評議員　倉形　桃代

一　概要

令和５年４月29日（土）正午より、秋田県秋田市川尻に鎮座する総社神社境内において「昭和天皇御生誕百二十二年祭・第三十二回秋田県特別攻撃隊招魂祭」が、秋田特別攻撃隊慰霊実行委員会主催（委員長・舛谷政雄氏）で斎行された。当日は天候に恵まれ、若葉薫る爽やかな日和であった。

特別攻撃隊忠魂之碑

招魂祭は、司会の小野りゅう氏（能代市議会議員）の開式の辞に始まり、参列者約40名全員で昭和天皇武蔵野御陵遥拝、雅楽を伴奏に国歌斉唱、佐々木三知夫氏のラッパ吹奏「国の鎮め」と共に黙祷、総社神社・川尻孝紀宮司はじめ神職による修祓・降神・献饌・祭詞奏上、神前に設えた舞台で巫女による神楽「浦安の舞」が奉納された。

その後、秋田県出身特別攻撃隊英霊56柱のご祭神名奉読、元海軍の夜間戦闘機「月光」・芙蓉部隊所属「彗星」の搭乗員でもあった藤本光男氏の「追悼のことば」が伊藤見一氏（救う会秋田・幹事）により代読された。総社神社青年会の渡部顕氏による海軍中将大西瀧治郎の遺書の朗読後、玉串奉奠・撤饌・昇神の儀により、神事は終了した。

次に、日本詩吟学院岳風会・斎藤法生氏によるご英霊の遺書吟詠があり、秋田県鹿角市出身の関　豊興海軍大尉（昭和20年８月４日神潮特別攻撃隊多聞隊員として沖縄海域で散華）のご遺詠が詠じられた。小野氏による力強い「秋田県民歌」の披露、主催者代表・舛谷政雄氏挨拶、聖寿万歳、全員で「海ゆかば」を歌い、閉式となった。青葉が繁る樹々に囲まれた神聖な空間、雅楽の伴奏で国歌と「海ゆかば」を斉唱したことは、とても貴重な体験だった。

招魂祭後、社務所内会館に場を移して、絵本作家の、ときたひろし氏による「英霊の今とこれからの世界」をテーマとした記念講演会が行われた。

記念講演をされる、ときたひろし氏

二　参列所感

今回、数十年ぶりに秋田を訪れた。東京では葉桜になってしまったが、秋田はまだ桜が綺麗に咲き、色とりどりの花と新緑の輝きが、青空に映えていた。

ここ最近の慰霊祭は、ご遺族、戦友の方々の参列がめっきり減少し、特攻慰霊顕彰をどのように未来に繋げていくかが、何処でも大きな課題になっている。総社

神社における招魂祭は、平成４年に、海軍の特別攻撃隊員であった桝谷健夫氏（ツバサ広業株式会社創業者）が私財を投じて建立された「特別攻撃隊忠魂之碑」の前で行われる。参道には、英霊のご遺影や遺書等を永久に保存・展示できるように、特殊な方法でアルミ板に焼き付けた「特攻写真版」が飾られ、参列者を迎えていた。実行委員長の舛谷政雄氏は、父・健夫氏のご遺志をしっかりと受け継ぎ、有志の方々と共に毎年招魂祭を実施されている。

招魂祭の前日、秋田県護國神社を参拝した。ここにも桝谷健夫氏が奉納された立派な「殉国秋田県人之碑」「さざれ石」「君が代」歌碑がある。英霊の慰霊顕彰に一心に取り組まれ、後世に伝える形を残してくださった桝谷健夫氏の情熱とご功績に、心からの敬意と感謝を捧げます。

三　記念講演について

記念講演をされた、ときたひろし氏の御祖父様も、舛谷氏の御父上と同じ震洋特攻ということが最近分かり、今回のご縁とも繋がったとのこと。「人は体が無くなっても心は存在しているのではないか？その働きかけが作用して、絵本が生まれた」と、著書「お父さんへの千羽鶴」「９番目の戦車」の執筆のきっかけとなった不思議な体験を話された。そして“命より大切なものを見つけられる教育を”“喜びで動きつながる人間関係を”“役に立ちたくなる勤労環境を”“誇りがもてる納税を”“「嬉しい、喜んでほしい」を原動力とする社会を”と提言され、最後に「それは、自分達一人一人が意識を変えないといけない」と締め括られた。お茶とお菓子が配られ、講演会は盛況のうちに終わった。

四　藤本氏の追悼のことば

ここに招魂祭で代読された藤本光男氏の「追悼のことば」を、ご本人の許可を頂き、貴重な証言としてここに紹介する。

○追悼のことば

ここ千数百年の歴史をもつ総社神社境内に故桝谷建夫様が、まさに精魂こめて建立された「特別攻撃隊忠魂之碑」そしてその碑の前で「秋田県特別攻撃隊招魂祭」が執り行われたのは平成四年四月二十九日であります。

そのときのことを、総社神社宮司川尻孝紀様はこう語っておられます。

「当初、桝谷様から建立に至る経緯と思いを懇切に聞いて感動と敬意の感を強くしたことを思い出します」

「本来なら、国家が行わなくてはならない戦後の処理事業を、かつて特別攻撃隊に身を置いた桝谷健夫さんは『光栄と誇りある正しい歴史観を取り戻すことが、ご英霊に報いる自分の使命』と信じ、私財を投じて成し遂げようとなされました」

「日本は神話から神武創業の歴史えとつながり、君民一体の国柄を築いてきました。天皇陛下を頂点に頂き、秩序と道義を尊ぶ国家として二千年来修養を積んできた国であります。世界一歴史の古い国であります。

しかし、戦後日本の教育は、戦前の歴史と文化を顧みることなく踏みにじり、過去を全く否定してきました。

その結果、自分の国に誇りを持てず、政治家も誤った歴史観を鵜呑みにして近隣諸国に謝罪し続けております。

領土を侵されても遠吠えばかりで、何の手立ても打てない情けない状況に陥っています。

この状況を打破するには、正しい歴史、文化感をもった若者が立ち上るしかないのです。

幸い近年は戦後教育や悪弊に気付き始めた若い人達が徐々に増えているのも事実です。今こそこの声を広げ実践していく時だと思います」。

平成の世二十五年経った四月二十九日、

あらためて招魂祭を振り返ってのお言葉であります。

かつての軍国少年達も、日本の指導者となり、世界の中の日本として、日本の地位を高めて参りました。

今年は世界の主要七ヵ国の議長国として広島で、その「Ｇ７」の開催をみることになりました。

あの大戦を知る人達は、世上はじめて原爆が投下された「ヒロシマ」のことを知っております。

そして、その識者達の頭を過ぎったのは、大戦末期、日本の若者達の戦い。特別攻撃隊のことであったろうと思います。

かつて、フランスの思想家モーリス・パンゲはこう述べております。

「生きていることが美しかるべき年頃に、立派に死ぬことにこれらの若者たちは皆心を砕いた。そのため、彼らは人に誤解された。彼らにふさわしい称賛と共感を与えようではないか。彼らは、たしかに日本のために死んだ。だが、彼らを理解するのに日本人である必要はない。死を背負った人間であるだけでよい」と。

祖国存亡の危機にあたり、ひたすら国の安泰を願い、　家族の幸せを念じ、進んでわが身を爆弾として敵艦に体当りを敢行した特別攻撃隊。

その戦術の是非は別として、この日本にそのような若者の集団がかつてあったことを忘れてはなりません。

私の同期生に六名の特攻隊員が居ります。

七十五年も前のことですが、鮮明にその顔、仕草は憶えております。

湯沢市出身の小松文男君、大曲市の桑野正明君、角館の山本英司君と石橋憲司君、山内村の高橋忠君、樺太大泊　中学出身ですが、本籍能代市の信太広蔵君。みな十八、九才の少年です。今の高校三年生です。

心身ともに鍛え抜き、ようやく一人前の搭乗員に近づいた・・・と思ったとき、特別攻撃を命ぜられたのです。

今を生きる若者にできることではありません。

戦争の時代だから、止むを得ないだろう。と片づけてしまうには、あまりにも惨い戦法です。

私事で恐縮ですが、終戦時、私は静岡県藤枝航空基地に居りました。

八月十五日、直立不動で終戦の玉音放送を聞き、日本の敗戦を知ったのです。

三日後、総員整列の号令で指揮所前に集合、美濃部隊長の訓辞をうけました。

「戦争は終った。隊は解散する。すぐ家に帰れ、軽挙妄動は許さん。樺太、東京の者は残れ」。

私が能代の自宅にたどり着いたのは八月二十二日です。あまりにも早い復員でした。

両親の驚きと喜びは今でも憶えております。

日常語られる特別攻撃隊。若い搭乗員達はいずれは特攻だろう。誰もが思っておりました。

隣、近所で召集された若者達は誰一人帰っておりません。しばらくは隠れるような日々でした。

昭和二十一年春、私は軍歴を隠して福島経済専門学校を受験、幸い合格。学生寮「信夫寮」の入寮手続きまで済ませて帰りました。「復員学生の事もあるので入学式、始業式は六月頃になるだろう」。との事でした。

その入学式直前、学校から一通の電報が配達されました。

『マッカーサー司令部の命により退学を命ず』です。

同時に学校から野呂田教授が能代市の吾が家に来られ「私達も驚いている。陸軍士官学校、海軍兵学校の生徒達も入学しているが、誰も何とも言ってこない。マッカーサー司令部が何を根拠に口出し

しているのか判らない。来年また受けてくれ」と言って帰りました。マッカーサーは敗戦国日本の支配者でした。

誰も逆らうことはできません。

私も無気味でしたが、漸く判ったのは戦後四十年も経ってからでした。

終戦時、私が所属していた航空隊は、艦爆彗星そして零戦からなる「第一三一航空隊」隊長は美濃部少佐でした。美濃部少佐はこの部隊に「芙蓉部隊」と名付けたのです。

沖縄戦での芙蓉部隊の夜間攻撃は「凄まじい」の一語につきるものでした。

米軍もよく知っておりました。が米軍が驚いたのは終戦後であります。

芙蓉部隊の本隊は九州岩川基地。訓練基地は静岡県藤枝基地でした。八月末、厚木飛行場に降り立った米軍先遣隊が先ず向ったのが藤枝基地でした。

滑走路の片側、そして隣接の空地に整然と並べられた艦爆彗星そして零戦、約七十機。ピカピカに整備され、すぐにも飛び立てる状態です。

チリ一つない兵舎、しかし通訳のできる事務方が数名と整備員。対応はしっかりしておりましたが搭乗員は一人も居りません。無気味さを感じたに違いありません。

進駐軍が取りかかったのは復員した搭乗員をさがし出すことでした。私もさがし出されました。

「就職したのであれば、それでよい。ただ国立の大学、専門学校への入学は駄目だ」と言われたそうです。

私は戦犯扱いされたのです。

いま、そのアメリカと日本は同盟国です。

国の防衛はアメリカ頼りです。

ご英霊はどうみているだろうか。

「日本人よ、しっかりせい。この日本は自分で守れ。頑張れ！」という声が聞こえてくるようです。

いま、私の手元に一冊の絵本があります。

「お父さんへの千羽鶴」です。絵と文は「ときたひろし」さんという方です。絵本の服装からみると海軍士官でしょう。

ご両親と奥様、”ともえ“ちゃんと言う一人娘。明るいご家庭です。

三日だけ休暇をもらって帰宅したお父さん。

久しぶりに家族そろっての夕飯。

そのとき奥様は「みなでつくった」千羽鶴を渡しました。

家族の心のこもった千羽鶴に、お父さんは涙が出そうでした。

翌々日、お父さんは家を出ました。

見送りを断って一人でバス停に向かいました。

お父さんはもう一度だけ振り返りました。

死んでもみんなのこと忘れないよう、もう一度見たかったのです。

そして戦いに臨みました。

零戦をつかっての壮絶な特攻戦。

戦いがその幕を閉じたのは八月十五日です。

お父さんは、あの日から歳をとっていませんが、

今はもう”ひいおじいさん“です。

私は二度読んで二度涙しました。

あの戦争の現場がまざまざと蘇えってきました。

多くの若者たちが死んだ。死を恐れぬ何百、何千という若者達が、この日本には居た。つい昨日のような思いでした。

いま、「特別攻撃隊忠魂之碑」の前に立ち、あらためて故桝谷健夫様に思いを致し、後をついで今日、その尊い招魂祭をつづけておられる桝谷政雄様に心から感謝申し上げ文(コトバ)を終りたいと思います。

ご参列いただきました皆様、まことに有難うございました。

令和五年四月二十九日　　藤本光男

第69回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

事務局長　石井光政

晴天の令和５年５月３日（水）13時から15時までの間、鹿児島県南九州市知覧町の知覧特攻平和観音堂前において、４年ぶりの制限なしの慰霊祭が斎行された。

当日は、慰霊祭会場に少し早めに到着し、知覧特攻平和会館企画展の「知覧基地の３隊長」も拝見した。３人とも陸士57期の同期生で、偶然知覧基地で再会し、それぞれ特攻隊長として、同じ５月11日に出撃して散華された方々である。私も空自の現役時代に陸軍航空士官学校の跡地の入間基地勤務でお世話になった方が57期の方だったので、その方々の分までじっくり拝見した。常設展示場では、お子さんを連れた方が、特攻戦没者の写真を指差しながら、「あなたによく似てるでしょ、ひいおじいちゃんですよ」と言っているのを見て、このように忘れずに記憶を繋いで下されば、亡くなった方もさぞ嬉しいだろうと聞いていた。

式典は、13時に知覧らしく献茶（日本礼道小笠原流鹿児島支部会員による）で始まり、黙祷、僧侶による読経（この間焼香）、知覧特攻慰霊顕彰会会長（塗木弘幸　南九州市市長）の追悼のことば、県議会・市議会の議員及び遺族代表等の慰霊の言葉に続いて、献吟、献花、献奏と約２時間の慰霊祭は厳粛かつ滞りなく斎行された。

今年の参列者は、天候も快晴だったこともあり、約５００名（内、ご遺族約１８０名）の多くの方が来られていた。

来年以降も多くの参列者が集い、特攻で亡くなられた方々に感謝の誠を捧げられることを願ってやまない。

特攻平和観音堂内部（中心に特攻観音が安置されている）

特攻平和観音堂に焼香のために並ぶ人々

第11回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭

評議員　倉形　桃代

令和5年5月13日（土）11時より、福岡縣護国神社（福岡市中央区六本松）参集殿において、第11回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭（主催・福岡県特攻勇士慰霊顕彰会会長・塚田征二氏）が斎行され、当顕彰会代表として、岩﨑茂理事長と共に参列した。当日は小雨模様であったが、コロナ禍のマスク着用等の感染対策が緩和された中、ご遺族・来賓・議員・陸海空自衛隊の指揮官等、約１３０人の参列者が集まった。参集殿の壇上には祭壇が設置され、岩﨑理事長をはじめ紹介された出席者代表が着席した。

○祭典之部

祭典の部は、開式のことばに始まり、全員で国旗敬礼・国歌斉唱・クラリネットによる「国の鎮め」吹奏に合わせて福岡県特攻戦没者３０１柱、昨年凶弾に斃れた安倍晋三元内閣総理大臣、そして本年４月に発生した宮古島沖陸上自衛隊ヘリコプター航空事故殉職者への黙祷を捧げた。続いて田村豊彦宮司はじめ神職による修祓・降神之儀・献饌・祝詞奏上・祭主である塚田会長の慰霊顕彰の辞・玉串奉奠・撤饌・昇神之儀を以て神事は終了した。

参集殿檀上に設置された祭壇

○式典之部

小休止後の第2部では、電報の披露後、福岡県出身の英霊、回天特別攻撃隊菊水隊・佐藤　章海軍少尉（昭和19年11月20日ウルシー海域に於いて戦死）のご遺書の奉読があった。その後、陸上自衛隊第４音楽隊（春日市・福岡駐屯地所属）による演奏があり「分列行進曲」「同期の桜」「この国は」「ふるさと」「花は咲く」「日本陸軍の歌」「海ゆかば」「行進曲軍艦」が演奏された。どの曲も、慰霊の場にふさわしく、勇壮さと優しさに満ちた音色に、ご遺族が涙を拭われるお姿もあった。本当に素晴らしい、心打たれる演奏であった。続いて博多券番の芸妓衆による舞踊の奉納、ご遺族代表・松井宏喜様のご挨拶・トランペット吹奏に合わせ、全員で「同期の桜」「海ゆかば」奉唱・閉会のことばで慰霊顕彰祭は終了した。

○所感

場を移して、アゴーラ福岡山の上ホテル＆スパで直会が行われた。田村宮司のご挨拶の中で、慰霊顕彰がなかなか後に繋がらない状況であることを、非常に憂いている、というお言葉があった。確かに何処でも参列者の減少や、ご遺族・戦友の方々のお姿が減りつつあり、その後継者も多くはないのが現状だ。当会が各県の護國神社に建立している「特攻勇士之像」を通じての慰霊顕彰の継承をどのようにしていくかも、大きな課題になっている。私達、戦後そうたってない時代に生まれた世代は、戦争体験者の方々から直に話を聞くことができた世代である。その情報を基に、未来に繋ぐべく学び記録し、継承していく使命があると思う。塚田会長の「慰霊顕彰祭は、未来永劫に続ける」との頼もしいお言葉も伺った。

日本会議をはじめ若い方々の参列・作業をサポートされるお姿が多かった。今後も関心と真心をもって勉強・先人達のご遺志を受け継いでいかれることを期待している。

慰霊顕彰祭は、毎年5月の第2土曜日に行われている。

「すべての人が喜んで死んだなどとは言わない。しかし、彼らのほとんどは、誰にでもやってくる『死』が、少しばかり早く訪れただけだとでもいうように、そして自分の生死を祖国の興亡にかけることのできる矜持を胸に秘めて、どこまでも明るく、淡々と、散っていった。・・・

福岡縣護国神社には七十九年前に特攻出撃した三百一名の英霊が祀られています。感謝の誠を捧げるお祭りに是非、ご参加ください。」

＊＊＊第11回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭の案内より＊＊＊

福岡縣護國神社本殿

○大刀洗平和記念館

慰霊顕彰祭の前日、かねてから行きたかった大刀洗平和記念館（朝倉郡筑前町高田）を訪ねた。市内から西鉄大牟田線で小郡駅乗り換え、甘木鉄道で大刀洗駅まで約1時間余り、空に憧れた幾多の若鷲が訓練に勤しんだ場所である。館内に入ると、学芸員の方に案内され、シアターで「大刀洗１９４５・３・27」という映像を観た。祖母がひ孫に体験を語る形で、周辺の戦跡の説明、当時の生活、１９４５年３月27日に起きた大刀洗大空襲により、多くの子供たちの命が奪われた話等が紹介されている。館内には、実物の零戦はじめ多くの航空機や史料・ご遺影や遺書も展示されている。特に1階天井部分に吊られたB―29の大きさを示すスケールは、その機体の巨大さを実感できて、とても驚いた。

多目的室では、たくさんの学生達が語り部の話を聴いていた。「百聞は一見にしかず」と言うが、この日の記念館での体験が、次の世代の語り部たちが生まれるきっかけになれば良いなと思いながら、つい長居をしてしまった記念館を後にした。

太刀洗平和記念館

57回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

理事 福江広明
広報委員 四谷桜子

慰霊祭等の概要

令和５年５月14日（日）、長崎県東彼杵郡川棚町新谷郷（しんがえごう）において「第57回特攻殉国の碑慰霊祭」（以下「慰霊祭」という）が、旧海軍の水上特攻等により散華された英霊を慰霊顕彰する『特攻殉国の碑』（昭和42年５月建立）前にて催行された。

慰霊祭当日の早朝、宿泊先（長崎県佐世保市内）から慰霊祭会場に向かう途中、戦没者慰霊の目的のため、佐世保東山海軍墓地に立ち寄る。ここには、佐世保に鎮守府が置かれ前大戦が終了するまでの約60年間に亡くなった海軍将兵等17万余柱の霊が祀られている。

この旧海軍墓地から慰霊祭の会場となる川棚町新谷郷までは車で１時間余り。現地に到着したのは午前10時半。慰霊祭会場及びその周辺では多くの住民の方が初夏を感じさせるほどの気温（24度程度）の中で、最終的な諸準備を入念に行なっていた。多くの年配の方に交じって臨時駐車場の除草作業等を行う父兄同伴の児童も散見された。

こうした準備状況を見ていると、新谷郷の方にとって、慰霊祭は単なる年中行事ではなく、子弟へ郷土愛や戦争の歴史を教え育み、慰霊顕彰を伝承していく貴重な機会なのだと実感できた。

大東亜戦争戦没者慰霊塔
（東山海軍墓地内）

祭壇が設けられた特攻殉国の碑

その後、慰霊祭開始時間までの間、慰霊会場近隣に点在する魚雷艇訓練場、魚雷発射試験場等跡を見学するとともに、地元関係者の方から慰霊にかかる話をうかがった。その際の状況及び所感については、「所見」の項において、四谷広報委員が記述。

慰霊碑の土台には次の文が銘記されており、慰霊祭の催行趣旨を理解できる。なお、銘文は句読点無しのため、そのママ記述している。

『昭和19年　日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷に移し魚雷艇隊の訓練を行った

魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇でペリリュー島の攻撃硫黄島最後の撤収作戦など太平洋印度洋において活躍した

更にこの訓練所は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊伏竜特別攻撃隊を編成し　また回天蛟竜などの特攻隊員の練成を行った　震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当たりする木造の小型高速艇で七千隻が西太平洋全域に配備され比国コレヒドール島沖で米国艦船四隻を撃破したほか沖縄でも困難な状況のもとに敵の厳重なる警戒を突破して

慰霊碑近くの片島魚雷発射試験場跡

特攻攻撃を敢行した　伏竜特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ

今日焼土から蘇生した日本の復興と平和を見るとき　これひとえに卿等殉国の英霊の加護によるものと我等は景仰する

ここに戦跡地コレヒドールと沖縄の石を併せて　ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し遠く南海の果に若き生命を惜しみなく捧げられた卿等の崇高なる遺業をとこしえに顕彰する

昭和四十二年五月二十七日

有志一同

元隊員一同』

慰霊祭については、令和の時代になった以降の２年間はコロナ禍の影響を受け地元の役員の方のみが参列、また昨年は継続するコロナ禍の中、遺族及び来賓を限定して執り行われたとのことである。コロナ感染が沈静化した今年、前日までの雨が上がり快晴、微風の下、コロナ以前と同規模の約２００名が参列し、定刻どおり午後２時の挙行となった。

式次第は次のとおり。

1　開会の辞
2　軍艦旗に敬礼
3　国歌斉唱
4　黙祷
5　慰霊の辞
6　慰霊電報・書翰奉呈
7　拝礼
8　「同期の桜」合唱
9　閉会の辞

「慰霊の辞」は新谷郷総代、長崎県知事代理及び川棚町長代理の３名の方が奉読された。祭主である新谷郷総代・寺井理治氏は、「この１年、特攻殉国の碑に隣接する資料館・震洋展示館に、約２０００名の来訪者があり、ボランティア・ガイドの協力を得て歴史教育を実施した一方、一般メディアを観るにつけ若き世代の意識から、先の戦争が風化していくことに懸念されるため、当地にあっては、今後とも歴史の世代継承を末永く行うことを使命としている」と力強く述べられた。

コロナ以前の慰霊祭では、震洋隊の元隊員の方が「隊員代表」として慰霊の言葉を捧げられていたが、今年は拝聴できず、あらためて慰霊顕彰に関する時代の移り変わりを感じた次第である。

参加者全員による「同期の桜」の合唱後、新谷郷総代がお礼の言葉の中で、「来年も５月第２日曜日の午後２時から必ず慰霊祭を執り行うことから、地元からの連絡が不行き届きのところがあろうかと思うが、ぜひとも参列いただきたい」と強調され、閉会となった。午後３時半には、予科練であった私の実父も搭乗員の一人であった震洋特攻艇の訓練基地、そして戦時遺構の町、長崎県川棚町新谷郷を後にした。

２　所見（四谷桜子　記）

令和５年５月14日（日）、長崎県東彼

杵郡川棚町にて第57回特攻殉国の碑慰霊祭が斎行され、福江理事と私の二名で出席いたしました。

当日は気温が高かったものの時折爽やかな風が吹く中での穏やかな慰霊祭となりました。

こちらの慰霊祭は、以前は震洋遺族会が主催されていましたが、ご遺族の高齢化に伴い五年程前から新谷郷自治会の主催になっています。

自治会の女性によると、震洋という兵器自体があまり世間に知られておらず、このままだと廃れていくことは明白なので、なんとか私たち自治会の力で少しでも情報を広め、しっかり引き継いでいこうという思いでやっている、と仰っていました。

新谷郷には震洋の基地があったとはいえ、近くに元隊員やご遺族が住まわれているわけではありませんが、約３００戸あるうちのほぼ全戸が協力的で積極的に準備に携わっていただいているそうです。

当日は自治会の方何名かにお話を伺いましたが、どなたからもこの地で海上特攻の訓練が行われ、国を守るために命を懸けてくださった特攻隊員に感謝するとともに、そういった歴史があることを伝えていかなければならないという気持ちが感じられ、私も身の引き締まる思いがいたしました。

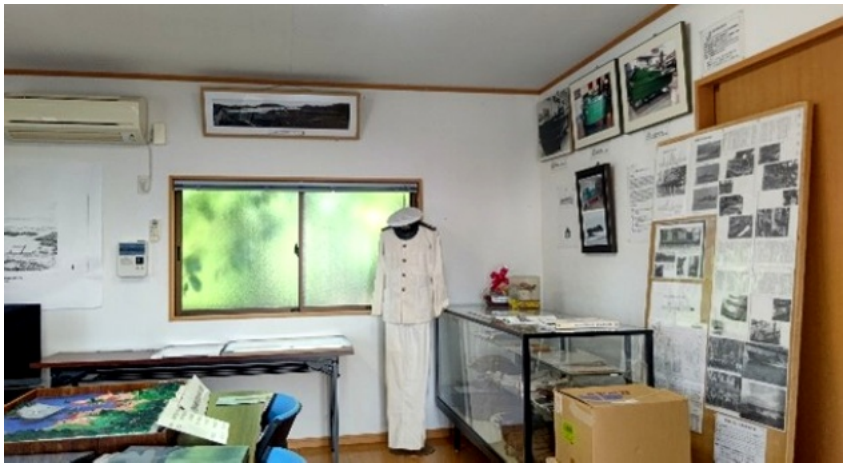
また今までは毎年、元隊員の方が慰霊祭に来られてお話をしてくださっていましたが、このコロナ禍の間に亡くなられたり施設に入られたりなどしており、もう殆ど出席も叶わないとのことです。

全国的にこの３～４年で元隊員の方からお話を伺うことが特に難しくなったと感じますが、今後さらにこういった機会が減り、情報を残していくことや引き継いでいくことの難しさを感じました。

震洋は戦争末期に生産され全国で百十四隊が編成されましたが、実際に出撃したものはフィリピンと沖縄の二隊のみとなっています。輸送船での事故や訓練途中の殉職等も多かったためそもそもの情報量が少なく、資料館の収蔵品にも限りがあるため、今後はご遺族のみならず震洋に関する写真や文書など、実体験に基づく資料があればぜひ寄贈をお願いしたいとのことでした。

もし何か情報をお持ちの方がいらっしゃれば下記までご連絡をお願いいたします。

連絡先：「特攻殉国の碑保存会」
電話：０９９５-８３-２１２５



特攻殉国の碑に隣接する資料館内

関西白鴎遺族会慰霊祭並びに「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

令和５年５月21日（日）、京都霊山護国神社において斎行された「第73回関西白鴎遺族会慰霊祭」並びに「第12回「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

当日は天候にめぐまれ、朝から暑いにも拘らず、参列の皆様は受付開始時間より前に参集されていました。

参列は、ご遺族・来賓・一般の方を含め50名、コロナ禍で式典が行われない中、同期の方々が、皆様お仲間のもとに逝かれてしまった事が寂しく残念でなりません。

京都霊山護国神社本殿

以前参列させていただいた時の朝、空を見上げると飛行機雲が二本ありました。本日もまた同じく飛行機雲を見ることができました。慰霊祭当日の飛行機雲、在天の皆様が逢いに来てくださった様に思ってしまうのは、私の思い込みでしょうか。

11時開始の慰霊祭に先立ち、10時30分軍艦旗掲揚及び集合写真の撮影が行われました。

慰霊祭典は、本堂において国歌斉唱に始まり、修祓・祭主一拝・祭主祝詞奏上と続き、関西白鴎遺族会山田正克会長による、想いが強く込められた祭文奏上・玉串奉奠・祭主一拝・京都霊山護国神社木村宮司様の挨拶・来賓及び主催者挨拶と式次第に則り粛々と、進められました。山田会長挨拶の後には、参列者全員による献歌「同期の桜」を斉唱式典を終了しました。

式典終了後は、「あゝ特攻」勇士之像に玉串奉奠をいたしました。玉串奉奠前には、特攻像の説明をさせていただきました。皆様熱心に聴いて下さったので良かったと思います。

その後、山の上の昭和の杜にある、「白鴎顕彰の碑」に向かい、玉串奉奠を行い、その後境内において懇親会が行われ、参列者の挨拶・歌唱と和気藹々のうちに散会となりました。

慰霊祭開始前に、関西白鴎遺族会山田会長の奥様より、ご子息正宗様（ご次男）が、小学校３年生の時より６年生まで行っていた自由研究、特攻で亡くなった大伯父様の事から遺族の立場から考える平和について等（奥様の伯父様が予備学生13期、７２１海軍航空隊所属、昭和20年４月29日、神雷部隊第９建部隊の一員として鹿屋から零戦に５００kg爆弾装着のうえ、沖縄北端南東方に出撃、散華されました。）を拝見させていただきました。小学生が現地にも行き、ここまで調べたのかと驚き・感嘆・賞賛と共にとても嬉しく、胸も熱くなりました。特攻で亡くなった大伯父様がいること、お父様の背中を見ていること、お母様の想いを聞いていることがその背景にはあると思いますが、小学生の時にここまで調べ、自由研究で発表して下さった事は「特攻で亡くなった人達がいることを忘れないでほしい」と言うご遺族の方の想いを繋いでくれる次世代の子がいたと本当に嬉しく思いました。この自由研究は、靖国神社にも奉納されているとの事です。機会がありましたら、是非ご覧になっていただきたいと思います。

この関西白鴎遺族会慰霊祭は、山田会長とご家族及び関係者の方々のご尽力で続けられている慰霊祭です。

山田会長の、慰霊祭を無くしてはいけないと言う強い想いと、ご家族の方々の繋いで下さる想いがある限り、関西白鴎遺族会慰霊祭は、これからも回を重ねていかれることと思います。

若い命を捧げて飛んで征った方達のためにも続けていっていただきたいと願って止みません。

最後に次の句を捧げます。

「征く君と　ともに飛び行け　花筏」

斎文奏上

学徒出身戦没海軍飛行科予備士官の英霊に対しまして、謹んで斎文を奏上いたします。先の大東亜の大戦におきまして、航空決戦が祖国の存亡を決する戦況となる中で、旧制大学、高専・専門学校を卒業、または、在学中の学徒たちは、緊迫した祖国と同胞を護るために毅然と海軍飛行予備学生・予備生徒を志願し、学窓から大空の決戦場へ赴かれました。短期間の猛練習に耐え、航空隊指揮官として英知と勇気をもって戦い、２４８５名が雲ながるる果てに散華されました。そのなかで神風特別攻撃隊士官搭乗員の85％実に６５８名が学徒出身海軍飛行科予備士官でありました。一心に祖国の安泰と、家族の平安を信じ「後は頼む」の一言を託し生死を超越して戦われた精神こそ、この国を継ぐ者の指標であります。学徒出身飛行科予備士官の英霊の皆様方は、海鷲の呼び名のとおり悠然と力強く大空を舞い、帝国海軍士官として、武士として、最高の生き様と死に様を後世に残されました。男子の本懐これに勝るものはございません。皆様の勇気ある行動に守られながら、戦後の復興発展を謳歌させていただいておりますことに、こころより感謝申し上げます。

しかしながら、戦没者遺族は大切な肉親を亡くした悲しみを身をもって知る立場にもあります。この教訓から、これからの世界が平和であることを何より望んでおります。

また、我々日本民族だけでなく、世界中のどの民族の人々も幸せに暮らしてもらわねばなりません。そのために、先の敗戦により戦前の全てを否定するのではなく、古き日本人の素晴らしい精神を、今一度、現代に生きる我々が思い出すことと、それに加えて、敗戦の教訓をいかし、務めて世界平和に寄与していくことの両方が大切であると思います。

英霊への崇敬と感謝を申し上げるとともに、世界平和のこころを祈念しまして、第七十三回関西白鴎遺族会慰霊祭斎文を終わらせて頂きます。

令和五年五月二十一日

関西白鴎遺族会　会長　山田正克

「白鴎顕彰の碑」について説明する山田会長

三重海軍航空隊戦没者「若櫻の碑」慰霊祭

編集長　金子　敬志

令和5年5月21日（日）に斎行された、三重海軍航空隊戦没者「若櫻の碑」慰霊祭に参列させて頂きましたので報告します。

1　慰霊祭の概要

慰霊祭は、三重県津市香良洲歴史資料館（旧若桜会館）に隣接する若櫻の碑霊園において行われました。。

祭主は香良洲神社で、三重県隊友会（会長：三石浩夫氏）が全面的に協力されています。

式次第は次の通りです。

一　一同着席
一　神職着席
一　開祭の辞
一　軍艦旗掲揚
一　献　花
一　神　事
◎　修祓
◎　降神の儀
◎　祭主一拝の儀
◎　献饌
◎　祝詞奏上
◎　玉串奉奠
◎　撤饌
◎　昇神の儀
◎　祭主一拝の儀
◎　神職退下
一　主催者代表挨拶
一　後援会代表挨拶
一　追悼の辞
一　三重海軍航空隊歌奉唱
一　閉式の辞

四年前に参列した鮒田理事が書いていますが、不思議なことに慰霊祭は好日になるとのことです。その例にもれず、当日も好天、5月とは思えぬ夏を思わせる陽ざしの好天でした。

定刻11時を表す時鍾の6点鍾点打に合わせて、三重県隊友会会員により軍艦旗が掲揚され、慰霊祭が開始されました。

式次第の中の「追悼の辞」は、岩﨑茂理事長の追悼文を、私が代読させて頂きました。

慰霊祭は12時頃に終了となりました。当日の参列者は約50名で、初めて、旧隊員の参列が無かったそうです。

二　所見

冒頭に書いたように、香良洲歴史資料館は、三重海軍航空隊（予科練）の関係者により、昭和55年に「若桜会館」として開館し、その後、平成10年に旧香良洲町に寄贈され、香良洲歴史資料館となったものです。

旧隊員が多数慰霊祭に参列していた頃は、参列する旧隊員が若桜会館に宿泊して旧交を暖め、翌日の慰霊祭に参列されていたそうですが、旧隊員の高齢化が進み参列者が減少、とうとう今年は0になりました。旧隊員の減少は、各地の慰霊祭でも同様であり、致し方無いものです。

しかし、本慰霊祭は、三重県隊友会の強力な支援がありますので、今後とも継続されるものと考えます。

正面奥が「若櫻の碑」

国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭及び慰霊の集いに参列して

事務局長　石井光政

令和５年５月21日（日）鹿児島県霧島市において、第60回国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭（国分）と、国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集い（溝辺）が行われた。旧海軍は昭和17年に、今の陸上自衛隊国分駐屯地付近に第一国分飛行場を、昭和19年には現在の鹿児島空港に第二国分飛行場を開設し、昭和20年の米軍の沖縄進攻に伴い特攻基地として使われ、多くの若者が飛び立って行った。

このため、国分駐屯地正門前に「特攻機発進之地」という慰霊碑が建てられ、また、鹿児島空港を見下ろせる、溝辺の上床公園内に「特攻慰霊碑」が建立され、毎年午前と午後に分けてそれぞれ慰霊祭と慰霊の集いが行われている。

慰霊祭は午前11時から「特攻機発進之地」と書かれた慰霊碑前で国旗と海軍旗の掲揚、戦没者への黙祷に続き、委員長である中重霧島市長と阿多市議会議長、及び、特攻隊生存者代表として、小川達郎様が慰霊の言葉を述べられた。続いて、国分基地発進特攻隊員戦没者遺族代表の中島富士子様が追悼の言葉を述べられたが、この中で、遺族会も高齢化が進み、この60回を機に解散しますとご英霊に報告されていたのは、時の流れを感じさせ、私たちがご遺族に代わっても慰霊を続けなければと思った次第である。

その後、献花、国分駐屯地隊員による儀仗隊敬礼と音楽部の献奏が行われ、最後に、霧島市立舞鶴中学校生徒代表の大尾航平君が誓いの言葉を捧げた。

午後は、場所を第二国分基地（鹿児島空港）が見下ろせる溝辺上床公園内の「特攻慰霊碑」前に場所を移し、３時から慰霊の集いが行われた。国歌斉唱、黙祷、中島委員長の慰霊の言葉と献花に続き、ここでは、霧島市溝辺中学校代表の山口愛奈さんが誓いの言葉を奉納した。このの、同期の桜を皆で唱和し、国分駐屯地音楽部の演奏が行われ、慰霊の集いは無事に終了した。

参列していて、生存者代表（小川達郎様）、ご遺族代表（中島富士子様）のお言葉には戦没者を思う気落ちが切々と述べられ、感銘を受けるとともに、国分・溝辺それぞれの地で読まれた、中学生代表は、平和は与えられるものではなく、

「特攻機発進之地」碑（陸自国分駐屯地正門前）

「特攻慰霊碑」（溝辺上床公園）

維持するものだということ、そのためには、戦争を体験された方の声・感情を次世代に語り継ぐことが重要である、と述べていて、その思いを大切に人生を歩んでもらいたいと感じた。

ここに、この４名の方の言葉を、霧島市役所のお力添えで掲載の許可をいただいたので、読者の皆様にお届けしたい。

慰霊のことば

ここ国分特攻基地の主力部隊であった七〇一空、彗星艦爆橘部隊の生存者を代表して、謹んで慰霊の言葉を申し上げます。

現在私が立っているこの付近には、戦闘指揮所があり、飛行服に身を固め、祖国愛と犠牲的精神に満ちた搭乗員が搭乗割りの発表を、こぶしを握り締め見つめていた場所でもあります。

また壇上に立った指令官から悲壮な面持ちで祖国の困難を訴えられ、「攻撃を必ず成功させるように」との訓示に引き続き、飛行長からは、敵機動部隊の位置、兵力および異方向からの単独攻撃等の要領が説明され「最後に本隊は全員特攻である。ただし攻撃をして命中の確信のあるものは帰投せよ。その確信無き場合は、そのまま体当たりを決行せよ」と訓示された、悲壮感に満ちた場所でもあります。

昭和二十年初頭の第一、第二国分基地は、フィリピンや台湾沖航空戦で活躍し、満身創痍で生き残ったベテラン搭乗員達が、最新鋭彗星艦爆約九十機で、来るべき敵機動部隊との戦いに備え、単機または小編成部隊による索敵と、必殺爆撃を猛訓練して、満を持していました。

昭和二十年三月十七日、昧方の哨戒機が敵空母十八隻からなる大機動部隊の４群が、全速力で九州に接近してくるのを発見した。

この報に接した第五航空艦隊司令は、全力攻撃を下令した。

我が七〇一空も早速出撃することになり、向花の分散兵舎から、飛行場へと二十八名はトラックで駆けつけることになり、敵機動部隊と我が最新鋭彗星艦爆隊との合戦の火蓋が切って落とされました。

七〇一空の彗星二十七機が、日の出と共に始まった敵の空襲の間隙を縫って三波に別れ、単機ごとに次々と出撃していった。

敵も我が攻撃を予知し多数の戦闘機をもって、その行く手を阻んできたが、我が攻撃隊は零戦の援護もあって、多くが攻撃に成功した。正規空母二隻、戦艦二隻、巡洋艦一隻、駆逐艦二隻を撃沈。空母二隻大火災と輝かしい戦果を挙げた。しかし中尉機以下十九機は再び国分基地に戻ることはなかった。

翌十九日も我が彗星は早朝から発進し、二十三機が四波となって単機毎に逐次出撃していった。天候が悪いため交信不良の機が多かった中で、三機が空母突人を報じた。この日から七〇一空は、空母殺しと、その名を天下に轟かせることになりました。

しかしわずか三日間の戦闘で七〇一空の主力の大半は失われることとなりました。我が攻撃一〇三飛行隊長、真の勇者柏木大尉を含む十四機が帰らぬ人となられました。誠に無念の極みです。

この最も熾烈な国の存亡を賭けた戦いの最中に、十八才になったばかりの私達若輩搭乗員十三名は愛知県明治海軍航空隊で、最新鋭の四十三型彗星艦爆で急降下や洋上航法の訓練を終え、第一国分基地へ配属となりました。国分基地に着任した時は、福島付近はまだ桜の花が咲き残っておりました。

早速、攻撃の合間縫って、桜島の手前にある軍艦島へ四機で立て一列の追従訓練を受けたり、先輩搭乗員と清水の防空壕の司令部室で飛行服のまま、まんじりともせず出撃命令を待ったりしました。

今年もあの熾烈な戦いをした月日が、めぐってきました。このように慰霊祭でお会いできるのは、霧島市のおかげだと深く感謝しているところであります。

御霊が爆弾抱えた愛機に、こころの迷いを打ち消すように片手をぐるぐる回し、エンジン回せと走りより、小村側に愛機を置いているものは、トラックに飛び乗り、戦闘機の援護もなく、重たい爆弾を抱えて、敵グラマン戦闘機のまちかまえる南の空へ、祖国のためにと、出撃していったあの姿を忘れてはならない。あの純粋さを眼に焼き付けている生存者を代表し、合掌参拝し、心から哀悼の誠をささげます。安らかにお眠りください

令和五年五月二十一日

元７０１空彗星艦爆橘部隊

攻撃一〇三飛行隊員　小川達郎

追悼のことば

本日、国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭が、挙行されるにあたり、遺族を代表しまして謹んで追悼のことばを申し上げます。

本年は、六十回目の慰霊祭でございます。長年、慰霊祭には、第七〇一空の、生存者有志の皆様が、協力してこられました。お陰で、第一国分・第二国分基地発進遺族会の発足にも繋がり、県内の遺族会は、一般戦死者のみですが、霧島市・国分の特攻隊員の遺族会は、特筆すべき存在でした。

戦後七十八年、遺族は親から兄弟親族へ、妻から子や孫へと世代交代をしておりますが、近年、身罷られる方が相次ぎ、残念ではございますが、本年、慰霊六十回を以て、遺族会閉会になりますことを、ここにご報告を申し上げます。

しかし、時代が流れようとも英霊に対して、「感謝」「慰霊」それ以上に「継承」を忘れてはなりません。この国を守ろうとしてくれた、貴方がたの貴い命の重みがあればこそ、今日の日本があるということを、決して忘れてはなりません。

また、夫や息子を出征させ、子供を育て、悲しみに堪えながら、懸命に生きてこられた、母や妻や家族が、この国を護っていたことも忘れてはなりません。

どのように平和を説き、人権の大切さを説こうとも、国民を守り、救うことができる人々がいなければ、わが国の平和はあり得ないのです。

私の兄と同じ、第三草薙隊・宮内栄少尉が、日記の最終頁に残された言葉です。『眼前に死なし。任務遂行の一字のみ』

私達は、命とともに『志』も、受け継いでいることを忘れてはなりません。

私達の心の中に、永遠に、貴方がたは生き続けています。

最後になりましたが、慰霊祭を執り行って下さいます、市長をはじめ、慰霊碑保存委員会、並びに関係諸団体の皆様、長年、慰霊碑周辺の、整備・清掃をして下さいます市民の皆様のご厚情に対し、厚く御礼を申し上げます。

また先月、宮古島付近にて、自衛隊のヘリ事故で、部隊幹部の方々を含め、十名の貴い命が失われました。この場をお借りしまして、心から哀悼の意を表します。

本日は、その様な状況の中、陸上自衛隊国分駐屯地の皆様に、ご協力を賜り、改めて感謝を申し上げます。遺族も生あるかぎり、慰霊を続けることをお誓いしまして、追悼のことばと致します。

令和五年五月二十一日

遺族代表　中島富士子

誓いの言葉

私たち中学生は、戦争というものを経験することなく平和な時代に生まれ育ちました。戦争について学校の授業やテレビで見て学習をしたので想像することはできます。しかし、私たち若い世代は、戦争の本当の恐ろしさを知りません。実際に体験談を聴く機会も少なくなり、私たちは戦争への関心が薄くなってきてい

るとも言われています。

今回、この特攻隊員戦没者慰霊祭に参加させていただいたことで、戦争の悲惨さ、平和の尊さを改めて実感しました。戦争を体験された方々の忘れられない苦しい記憶、戦争犠牲者のご遺族の思いを聴き、終戦から今まで平和が保たれているのは、多くの人々が平和の維持に努めているからだと感じました。一方で、世界を見ると戦争が絶えず、平和を維持することの難しさも感じます。

平和を維持していくために、私たちが過去をしっかり知り、後世に伝えていきます。また、過去の不幸を繰り返さず、世界中の人々が平和で幸せな暮らしができるようにするにはどうすればよいのかを考え続け行動できる人になれるよう努めていくことを誓います。

舞鶴中学校３年　大尾　航

誓いの言葉

戦争のない、世界中の人々が平和で幸せな暮らしがきるように願う、この「国分基地　特攻隊員、戦没者慰霊の集い」に参列させていただくにあたり、今回私自身、戦争について深く考える機会となりました。

旧日本海軍航空隊　第二国分基地からは、私たちと年齢がさほど変わらない２１７名もの方が純粋な愛国心と使命感、そして、家族のことを思い特攻され、戦死されたと聴いています。

私たち中学生は、特攻隊や戦争の歴史・事実について、テレビ資料を見たり、授業で学んだりするだけで、情報として想像することしかできません。

だからこそ、この溝辺に暮らす一人として、戦争の記録が残されている意味を考え、一人でも多くの戦争体験者の声・感情を次世代に繋ぎ、“体験としての戦争”を風化させてはならないと私は思います。

今回、この「国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集い」に参列させていただいたことで、平和の尊さを改めて実感したとともに、戦争犠牲者のご遺族の思いを聴き、後世に語り継ぐことが、今を、そしてこれからを生きる私たちの務めだと考えます。

本日のこの貴重な経験を胸に、戦争のない、世界中の人々が平和で幸せな暮らしができるように努めていくことをここに誓います。

令和５年５月21日　霧島市立溝辺中学校
生徒会長　山口　愛奈

追悼文を朗読する大尾　航さん

追悼文を朗読する山口　愛奈さん

千葉県護国神社「特攻勇士之像」慰霊祭

理事長　岩﨑茂

去る5月26日例年どおりの「特攻勇士之像」前での慰霊祭が執り行われ、参加して参りました。今年の慰霊祭には、千葉県隊友会から河西監事役他3名、鈴木千葉県郷友会会長他3名、河野下総水交会会長、偕行会の方々の参加を頂き執り行われました。

既に当特攻会員の皆様はご承知とは思いますが、昨年2月、千葉県護国神社は千葉市中央区から、千葉市若葉区桜木へ御神体が遷座されております。今回の「特攻勇士之像」前での慰霊祭は、新護国神社では2回目でした。この護国神社には特攻隊として散華された138柱の御英霊が祭られております。

必ずしも大きな人数のご参加ではありませんでしたが、済々とした慰霊祭が粛々と執り行われました。慰霊祭の最後に千葉県護国神社の竹中啓悟宮司から、御英霊の御遺志を後世にお伝えする事の大切さのお言葉を頂き、慰霊祭を終了致しました。

78年になりますが、私は、私達が今、この様に平和で豊かな生活と安寧を享受できているのは、ご自身の命を投げ捨てても、愛するご家族、ご両親、地域そして祖国である我が日本国を守ろうとした若き隊員たちがおられたお陰であると信じております。この様な隊員がおられたこと、そして彼らの御遺志を後世に語り伝えることが我々に課せられた責務だと考えております。コロナ禍もあり、ここ3年の各地の慰霊祭も中止や規模縮小となりましたが、今年は、是非、各地での慰霊祭が今までどおりに、いやこれまで以上に多くの方々にご参加いただけるよう「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」としても尽力していく所存です。何卒、皆様方のこれまで以上のご理解とご協力をお願い申し上げます。

ご挨拶をされる竹中圭吾宮司

竹中宮司を囲んでの集合写真

第53回指宿海軍航空基地哀惜の碑慰霊追悼式に参列して

理事　福江　広明

令和５年５月27日（土）、「第53回指宿海軍航空基地哀惜の碑慰霊追悼式」（以下「追悼式」）が、鹿児島県指宿市東方にある慰霊碑公園内「哀惜の碑」前において催行された。

追悼式の会場は、指宿市の田良浜飛行場を見下ろす高台にあり、田良浜飛行場の跡地でもある。周辺地域は、ご存じのとおり薩摩半島先端にある九州有数の温泉場にして風光明媚な観光地である。

祭壇が設けられた「哀惜の碑」

指宿海軍航空基地では、昭和20年４月末から７月初めまで一連の菊水作戦の中で水上機による特攻が敢行され、出撃機数44機、82名の搭乗員が散華されている。なお、特攻戦没者のほか、訓練による殉職者及び米軍Ｂ29の爆撃による一般戦死者、計１１０名が尊い犠牲となられている。

この基地における航空作戦の特徴は、水上機を運用したことにある。使用された機種は追悼式会場の展示パネルにある「零式水上偵察機、零式観測機、94式水上偵察機」であった。この部隊編成・使用機種からすると、大戦末期すでに戦闘機、戦闘爆撃機、練習機等の航空機戦力が不足する深刻な戦況にかんがみ、水上機すらも特攻機へと転用しなければならない苦肉の策であったのだろう。現地の「指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会」（以下、哀惜の碑顕彰会）が作成された配布資料によると、水上機特攻の目的について「水上機の特攻の最大の狙いは、指宿基地を中継基地として月明の夜間に乗じて出撃し、沖縄周辺海域に蝟集する米軍艦船、特に輸送船を撃滅して機動部隊の補給を断つことであった」と記載されている。

当日の気象は、曇天にて気温24度、大型台風が沖縄方面に接近していることもあって風があり、海岸線に白波が立つ状況。過去３回の追悼式（第50～第52回）については、コロナ感染予防措置の観点から「哀惜の碑顕彰会」の役員により開催されたとのことであった。

今年度の参加者は遺族関係者（５名）、来賓、一般参列者並びに「哀惜の碑顕彰会」関係者参加者を含めて約40名の参列であった。ちなみに、元隊員の方にあっては、引き続きコロナ感染予防を考慮されてのことと思われるが、参列はなかった。

追悼式は定刻の午後３時に始まった。式順としては、黙祷に続いて神事（①一拝②修祓③降神の儀④献饌⑤祝詞奏上⑥慰霊のことば⑦玉串奉奠⑧撤饌⑨昇神の儀⑩一拝）が執り行われた。その後、参列者全員による献花を行い、午後３時45分には閉式のことばをもって終了した。

慰霊のことばについては、哀惜の碑慰霊顕彰会会長を務める打越明司・指宿市長が「現在の祖国の繁栄と指宿の発展があるのは、先人（英霊）による努力の賜物。これからも長く後世に語り続けるとともに、恒久平和を祈念していきたい」との哀悼の意を述べられた。

追悼式の終了後、主催関係者に話をうかがう機会を得た。その際、他の慰霊祭等と同様に、この指宿海軍航空基地に関係ある生存者及び遺族の高齢化が進み、

参列すること自体がいっそう難しくなりつつあるという実情を聞くことができた。また慰霊追悼式に関しては、政教分離に配慮しながら、市役所関係職員及び社会福祉協議会関係者の連携協力することで継続していくとのことであった。

今後は、「哀悼の碑顕彰会」という確立した体制があることから、図書館等の公共施設を活用して、指宿海軍航空基地関連の展示会を開催し地元の児童への歴史教育にも取り組まれ、若い世代の地域愛を醸成していくことも世代継承につながっていくのではないかとの印象を持った次第である。

「哀悼の碑」に隣接して設置されている展示パネルには、指宿で運用されていた機種及びその説明書きのほかに、「遺書」も掲示されている。ここでは、甲飛第13期の松永篤雄氏の遺書を以下に記し、あらためて哀悼の意を表したい。

なお、「特別攻撃隊全史」（公益財団法人・特攻隊戦没者慰霊顕彰会発行）によれば、松永篤雄氏は鹿児島県出身、昭和２年生まれ、階級は二飛曹、戦死日・昭和20年６月25日、戦死場所・沖縄周辺と記載（「特攻全史」２１５頁中）されている。

『遺書　松永篤雄　第13期甲種飛行予科練　第12航戦　２座水偵

私は今、従容として皇国の礎となり、春爛漫の桜花と笑って散って征きます。

神州大和島根に生を享けて19年、母上様伯母上様に御面倒をかけたばかりで、何の孝養もお努めも出来ずに征くのが何よりの心残りですが、今悠久の大義に生きる血戦特別攻撃隊の一人として沖縄の海に皇国の御楯と死んで征くならば「武人の本望だ」と言って孝行の端にも入れて下さると信じ、自分の心を慰めて居ります。

気まま坊主の篤雄も、猛訓練の結果、やっとお役にたつことが出来たのです。

日本男子として生れ、最も働き甲斐のある搭乗員として、いまや嵐の中の沖縄決戦場に死んでいく栄誉、何の思い残す事がありましょう。

澎湃と寄せる太平洋の荒波に醜敵の艦船百隻、必中必殺の巨弾を抱ける我が愛機は必ずや敵艦を轟沈、沖縄の海に万朶の桜を開かせます。

さようなら

お母様お伯母様、孝子ちゃん健やかに育ち、心と共に

私の後継者たることを誓って下さい。決して泣いて下さるな　笑って下さい。

父の仇はきっと私がとって見せます。

辞世　悠久の大義に生きん若桜　只勇み征く　沖縄の空

房姉さんにもらった桐の木は大事に育てて下さい。家内皆様の御健闘を祈ります。』

※彩色写真は「指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会」作成

零式水上偵察機

９４式水上偵察機

零式観測機

令和五年度筑波海軍航空隊慰霊の集いに参加して

評議員　原　知崇

令和五年五月二十七日土曜日、筑波海軍航空隊友の会が主催し茨城県笠間市の筑波海軍航空隊記念館で挙行されました「令和五年度筑波海軍航空隊慰霊の集い」に、顕彰会を代表して原評議員、原島評議員の二名で参列させていただきました。

五月ながら、当日は強い日差しの中での開催でした。会場である慰霊碑前に向かう道すがら、みるみる汗ばむ暑さでしたが、席にはテント設置し、飲料水を配布するなど、１００名以上の参列者の中にはご高齢の方も、また小学生もおられる中、主催側の深い配慮を感じました。開式前より勝田駐屯地より支援の陸上自衛隊施設学校音楽隊の演奏がありましたが、「日本海海戦」など往時の海軍記念日でもあるこの日にちなんだ選曲をされていたのが印象的でした。

慰霊の集いは十時ちょうどに開式、国歌の演奏に続いて「国ノ鎮メ」の演奏のもと一同、英霊に感謝の黙祷を捧げました。霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣隊より昭和13年に独立した筑波海軍航空隊は練習航空隊としての任務に従事していましたが、昭和20年３月には神風特別攻撃隊「筑波隊」が編成され、終戦まで84名が特攻隊に志願、60名が散華されています。

慰霊碑「筑波海軍航空隊　ここにありき」

引き続いて、筑波海軍航空隊友の会の松井方子会長よりご挨拶がありました。松井会長のお父様横山保中佐（戦後は航空自衛隊に奉職）は筑波空の飛行長をお勤めになっていた時期があり、そのご縁で終戦後は友部の地に残られましたが、終戦後軍人に対して厳しい時代の中にあっても土地の方から暖かく迎え入れられ、他にもそのような海軍軍人があったことをお話になり、戦争を知らない次世代の若者に慰霊を継承することが平和への道であるとお話しになりました。

来賓では山口伸樹笠間市長がご挨拶に立たれました。筑波海軍航空隊記念館は山崎貴監督の映画「永遠の０」の撮影に使用されたことをきっかけにミュージアム化され、最近も県とＮＰＯ、そして筑波大学の後援をもって地下壕の調査をし、類を見ない希少な施設であることが全国的に知らしめられました。現在では高い認知度を得て来訪者も増えたのだが、それだけではなく、ここは国土を護るための教育資産であること、英霊からの「しっかりしろよ、後を頼むぞ」という熱いメッセージが伝えられる場所であることを強く訴えられました。国を護る心意気を学ばなければならない、平和は黙っていては確保出来ない。その言葉は笠間市のみならず、いま日本国民全員が噛み締めるべき言葉でしょう。

その後、「海ユカハ」が吹奏される中で、献花が行われました。ご遺族をはじめ長く続く献花の列は多くの方にこの慰霊祭と、記念館が支えられていることを意識させるものでした。

引き続き、神風特別攻撃隊第六筑波隊富安俊助中尉（早稲田大学、13期予備学生出身）の遺書が朗読されました。「吾々

追悼演奏

は御国の防人として出て行くのです。私が居らなくなったら淋しいかも知れませんが、大いに張切って元気で暮らしてください。心配なのは皆様が力を落とすことです。」富安中尉は「永遠の０」の主人公のモデルの一人となった方ですが、昭和二十年五月十四日、航空母艦エンタープライズに突入され、同艦はついに終戦まで戦場に復帰することはありませんでした。出撃を前にした軍人としての高潔な決意と同時に、家族への深い慈愛を感じさせる言葉に、大変感じ入るものがありました。

式の最後は追悼演奏で、音楽隊長が慰霊碑の前に進み出て挙手の礼をされたのちに指揮棒を振るわれ、「鎮魂同期の桜」「若鷲の歌」「海ユカハ」を演奏されました。声を出して歌っている方もおられ、特に本来練習航空隊としてその任にあたった筑波海軍航空隊跡地において、眼前に青空を見上げながら聴く「若鷲の歌」は、この慰霊の集いを閉じるにあたり相応しいものに感じました。

コロナ禍ということで爾後の会食はなし、閉会後は弁当を各自いただいて、司令部庁舎や新展示館、地下壕（戦闘指揮所）、映画「山本五十六」で使われた実物大の零戦のレプリカなど見どころの多い記念館各施設を見学してそれぞれ解散となりました。暑い一日でしたが、自治体と筑波海軍航空隊記念館、そして友の会が一体となって、この慰霊の集いを後に引き継いでいく、ただ悲しみを伝承するだけではなく、国を守るということ、平和を打ち立てる大切さを強く伝えていくという熱い決意を感じた集いであったと思います。

なお、筑波海軍航空隊記念館では関連の企画展も年三回ほど入れ替わり、毎回精力的な展示をされていますので、一度行かれた方もまた重ねて訪問される意義がある記念館と思います。また、本年は同館を管理されているプロジェクト茨城によって美浦村の鹿島海軍航空隊跡地も公開されることが決定しており、同航空隊は水上機の練習航空隊であったことから、霞ヶ浦に面して大きなスロープが残っているほか、旧庁舎やボイラー棟、大きな自動車庫も見どころです。

地下壕（戦闘指揮所）

義烈空挺隊出撃七十八周年慰霊祭

評議員長　瀬彰孝
評議員　倉形桃代

一　初めに

5月28日、熊本市にある陸上自衛隊健軍駐屯地で行われた全日本空挺同志会熊本支部（支部長・松尾辰蔵氏）主催の慰霊祭に参加したので報告いたします。コロナ禍の影響のため開催は4年振りで、直前にヘリ事故がありごく質素に行われました。当顕彰会が参加したのは今回が初めてです。

義烈空挺隊慰霊碑（後方の三角布は落下傘）

二　慰霊祭

式次第
・開式の辞
・献灯
・国歌斉唱
・黙祷
・慰霊の詞　熊本偕行会　中垣秀夫会長
・お供物、御香料紹介
・献花
・合唱　「空の神兵」
・消灯
・閉式の辞

三　慰霊の詞

中垣秀雄熊本偕行会会長が、当時の戦況から始まり空挺部隊の歴史、義烈空挺隊の誕生から戦闘、米軍に及ぼした影響等極めて詳細な説明がありました。長文のため掲載は省略しますが、最後に今回発生したヘリ事故に関連し「坂本第八師団長はじめとする十名の隊員を失ったことは誠に残念で、その無念さは言葉に言い尽くせません。暗雲立ち込める南西方面や朝鮮半島情勢に対する第一線部隊として、更には南海トラフ地震への備えなど、朝な夕なに訓練に励む眼前の自衛官に対し、英霊の皆様の格別のご加護を賜らんことを願い、そして英霊の皆様の安らけく鎮まり給わんことを祈ります」と締めくくりました。

四　参加者等

木原稔衆議院議員、中垣秀夫熊本偕行会会長及び会員、防衛を支える会、日本会議会員、旧軍関係では奥山大尉と同期の牧勝美氏も百三歳で元気に参加されていました。現職自衛官は青木伸一第八師団長・同濱田剛副師団長・武田健軍駐屯地司令・石原西部方面総監部防衛副長・井川三典広報室長等、福尾淳一第一空挺団副団長・空挺予備員の隊員が二十数名・空挺同志会会員が十数名・一般の方々が

中垣偕行会会長のご挨拶

二十数名、総勢約60名。残念ながら懇親会等の場がなく特に牧氏にはご挨拶のみでお話を伺う時間がありませんでした。

五　その他

参加者の中に「花房（菊池）飛行場の戦争遺産を未来に伝える会」及び「花房（菊池）飛行場ミュージアム」（菊池市泗水町豊水）の永田昭会長代行がおられ、遺構、ミュージアムをご案内いただきました。同飛行場は大刀洗飛行学校の分校としてまた知覧への中継基地として存在、その遺産を残すべく尽力いただいておりました。ミュージアムでは企画展として、健軍駐屯地の広報室よりも詳細な義烈空挺部隊の紹介パネル等が展示されていました。（長瀬記）

花房(菊池)飛行場ミュージアム　永田氏と

＊写真提供　全日本空挺同志会　熊本県支部＊

○隈庄（くまのしょう）飛行場跡

慰霊祭の前日、隈庄飛行場跡に残る戦跡を訪ねた。前日調べたインターネットの情報では、地元で知られているとの事だったので、すぐに見つかると思っていたが・・・ホテルの方もタクシーの運転手さんも全く知らなかった。控えてきた住所と目印を頼りに、とにかく探すことにした。

隈庄は、義号作戦に参加した陸軍飛行第百十戦隊の四式重爆「飛龍」が発進した飛行場で、現在は「熊本市火の君文化センター」（南区城南町舞原）の敷地になっている。その一角に「碧空に祈る」の碑が建っている。飛行場の面影は、ほとんど残っていないが、嘗て多くの若者達が、この地で祖国防衛の為に身を挺して戦った時代があった事を忘れず語り継いで欲しいとの願いを込めて、碑は戦友・関係者の方々によって建立された。

次に、経路上、たまたま見つけたのは、弾薬庫跡地。説明板が建てられていたが、文字や写真は風化して、ほとんど読めなかったのは残念だった。

最後にやっと辿りついたのは、当時兵舎だった場所に残る「心字池」。現在は「くまもと南部広域病院」（南城町舞原無番地）の敷地内にあり、立派な解説板も建っている。池は「心」という字を模り、一帯は当時の面影を忍ばせる植え込みもある。この池の畔で、出撃前の搭乗員達が仲間と盃を交わしたというエピソードが残っている。このような英霊ゆかりの地が、地元の方々によって守られている事を嬉しく思ったが、平成28年の熊本地震により被害をうけた戦跡も多いそうだ。保存技術や金銭面の問題もあり、後世にどうやって残していくか、今後の課題となっている。（倉形記）

「碧空に祈る」の碑

第56回豫科練戦没者慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

令和5年5月28日（日）、陸上自衛隊武器学校（茨城県稲敷郡阿見町）内において斎行された第56回豫科練戦没者慰霊祭に、原評議員と共に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。この慰霊祭の会場は、元土浦海軍航空隊跡地であり、海軍飛行豫科練習生の練成が行われた場所そのものです。

慰霊祭は、ご遺族・同窓生・来賓等々大勢の参加者が参列する中、先に陸上自衛隊勝田駐屯地施設学校音楽隊による演奏及び松本隊長による歌唱のもと奉納舞踊が行われ、その後式典開始のアナウンスにより、式次第に沿い粛々と進められました。

主催者である、公益財団法人海原会副理事長（式典実行委員長）酒井省三氏による開式の言葉に続き、陸上自衛隊武器教導隊隊員による国旗掲揚・海上自衛隊下総教育航空群隊員による儀仗（弔銃）・陸海自衛隊員による献花が行われました。

その後黙祷・阿見詩吟会師範による奉詠、海原会理事長安井剛氏による、「我が国の安全を願い散華された豫科練全戦没者に哀悼の意を表すとともに御霊安らかならんことを祈る。また、後世に語り継ぐべく今後も末永く慰霊顕彰をしていく」という想いのこもった祭文と進み、ご遺族・来賓代表による献花・ご遺族代表による玉串奉奠・来賓挨拶に続き、ご遺族代表、甲飛第10期　神社明海軍少尉　甥神社正幸氏による、17歳で豫科練に入隊する時の叔父様の事、弟3人を亡くしたお父様の事を話されたご遺族の言葉・海原会行方参与による遺書朗読・施設学校音楽隊による奉納演奏と続き、酒井実行委員長の閉式の辞で無事慰霊祭は終了いたしました。

終了後は、参列者全員による菊一輪の献花が行われました。

皆様高齢のため、同窓の方の参列が少なくなってしまったのがとても寂しかったです。

以前慰霊祭に参列させていただいた時、飾ってあったパネルの前で、「これは自分の同期生で、飛んで征く1週間前に撮った写真なんだ。こんな仲間がいるから毎年杖をついてでも慰霊祭に来ているんだよ」と話をして下さった方がいらっしゃいました。この話は私の胸の中に深く残っております。このお話をして下さった方もお仲間のもとに行かれているのではないかと思います。今度は私が、替わりにはなれませんが、この方同様に皆様がいるから、皆様に会いに、これからも慰霊祭に参列させていただきたいと思っております。

若くして空に海に散っていた方々の「後を頼む」と言う想いを忘れずにいたいと思います。また、皆様にも忘れないでいて欲しいと思います。

最後にこの句を捧げます。

君が征く　雲のまにまに　桜咲け

慰霊碑前に掲げられた神社明海軍少尉の遺影

多田野語録
「名作に心を洗う」

会　員　多田野　弘

これまで多くの先哲の書から、心を洗われるような感動を受けている。その中で、最も強く心を揺さぶられ、私の人生観をゆるぎないものにしてくれた書がある。ピーター・F・ドラッカーの「現代の経営」である。

わが社は、昭和23年（私28歳）に、資本金50万円の零細企業として発足した。わずか半世紀余を経て、現在の規模にまで奇跡的に発展することができた。それは社員が成長し、それぞれの能力を力一杯発揮してくれたからに他ならない。私がおこなったのは、社員が育ち、やる気を起こす雰囲気をつくったことぐらいである。その原動力になったのが、ドラッカーの書にある、「利益は企業の社会貢献の結果である」という言葉であった。

恥を申せば、創業以来10年近く、私は企業経営の目的など考えたこともなく、ただがむしゃらに働き続けることで満足していた。丁度その頃、今にして思えば、玩具のような油圧クレーンをつくってみたのが予想外にヒットして、全国から注文が殺到した。急遽人員や設備を増やしたが、その割に生産は上がらず、かえって混乱をまねくばかりだった。何故うまくいかないのか、その原因を見出せず、自分の無能さをイヤというほど思い知らされた。そうした失意のとき、ふと「何のために企業を経営しているのか に対する答えを持っていないことに気がついた。

それまで私は、企業とは、社員と共に生きていく生活の手段だとしか頭になかった。確たる目的意識なしに経営している自分に愕然とした。企業経営の目的はどうあるべきかと真剣に模索し始めた。そうするうちに、前記の名著に巡り合えた。「利益は、経営の目的ではない、社会貢献度を示す尺度に過ぎない」という言葉に目から鱗がおちる思いがした。

以来、この理念で経営するならば、たとえ潰れても悔いはないと腹をくくった。数年を経ずして、私が得た経営理念は、発展している企業経営者の常識であるのを知った。わが社の社是を「創造・奉仕・協力」とし、現在それはわが社の精神文化、企業の風土となっている。ちなみに、献血率が４割となったのもそれをあらわしており、世界に誇れる快挙だといえる。今でも、ドラッカーの言葉に遭わなかったら、今日の私もわが社もあり得なかったと思っている。

次の名著は、オーストリアの精神心理医学者ヴイクトール・E・フランクルの書「夜と霧」である。彼はユダヤ人のためにドイツ、ナチスに捉えられ、アウシュビッツ収容所に容れられ、妻はガス室で殺された。彼は収容所の中で、人間の意外な事実を目撃した。皆、ガス室に送られることに戦々恐々としている中で、死人の靴が上等と見るや取り替える者がいた。病人のパンを盗む者もいた。だが一方、年老いた囚人が若者の身代わりにガス室に入っていった。限られた自分のパンを、そっと病人の枕元に置き作業に出ていく者もいた。また国歌を高らかに歌い、従容としてガス室にいく者もいた。彼はこのような崇高な行為は人間のどこから出ているのかを考えた。

フランクルは戦後になって、それは人間の超越的無意識から出ており、東洋でいう魂であると「夜と霧」に発表した。忽ち世界中で翻訳されてベストセラーとなり、日本でも多くの人に読み継がれている。私が戦場で死を決意できたのは、祖国を愛し家族を愛する、崇高な行為であることをフランクルは表明してくれている。嬉しくて誇らしく思えた。私は名作に心を洗われ導かれ、心の糧として歩んできたといえるだろう

多田野語録
「不惜身命」

会員 多田野 弘

この言葉は、「仏教で言う、道というもの、法というものは、なにものにも代え難い尊いものであって、その尊いものを求め行ずるには、この身この生も惜しまない。それを求むるが故に身命を惜しむ。」という意味である。私がこの「不惜身命」という言葉を耳にしたのは、１９９４年、貴乃花横綱の昇進伝達式の光景である。二子山親方の前に両手をついてこの口上を述べていた。命懸けで横綱道を行ずるのを誓ったのである。

不肖、私にも不惜身命の体験がある。青年期に過ごし3年間、南方の戦場体験である。よくぞ生き抜いてきたものだと、今でも奇跡のような思いがしている。第一線に出してくれと申し出て最初に赴任したのが、ニューギニアに隣接するラバウルであった。その後サイパン島からペリリュー島、続いてフィリピンへと転戦し、ゼロ戦の航空隊として僅か3年間に4戦場を戦った。

最初のラバウルでは、壮絶な戦いぶりに、私は血湧き肉躍るのを覚えた。毎日１００機に余る戦爆連合の来襲があったが、そのたびに待機していた我が戦闘機隊２００機余が一斉に激撃に飛び上がり撃退していた。しかしそのたびに若干の搭乗員と機材を失い、B24爆撃機の投弾には私たち地上整備員にも戦死者が出た。機を出発させた後、私たちが待機していた滑走路の縁につくった土盛りの防空壕は、B24が落とす1屯爆弾には、跡形もなく吹き飛ばされていった。

日を経るにしたがって、我が方は搭乗員と機材の補給がされず、米軍との戦力の差が日増しに大きくなっていった。死も、そう遠いことではないと考えるようになった。毎夜「今は無事だったが、明日は俺の番かも分からんぞ」と言い聞かせて眠った。ある深夜、心の奥から「びくびくせずに、潔く死ね」という声が聞こえてきた。その途端「国や家族の平安のために、命を捨てるのは男子の本懐ではないか」と、躊躇することなく死を受け容れることができた。

それ以来、心は青空のように澄み渡り、例日の雨と降る弾雨の中を平気で動き回れるようになっていた。この変わりようにに驚くと同時に、私に死を受け容れさせたのは、理性や心を越えた大きな力に違いないと確信するに至った。以来、自分が魂の存在であるのを知った。私の人生観が一変したのは言うまでもない。

ラバウルに続く各戦場も、数知れず死と対峙した。昭和19年1月、我が戦闘機隊はサイパン島へ移動することになり、私たち地上員２５０名余は2隻の貨物船で行くことになった。当時すでにラバウルは、空も海も米軍の支配下にあり、出ていく船はすべて沈められていた。

出航の前夜、船が沈めばどうして死ぬかを考え、眠れず時間だけが過ぎていった。泳ぎ疲れて、窒息死するしかないと絶望していたが、海底に向かって潜っていくと、失神することが閃いた。これなら容易いと思うと、安心し眠ってしまった。

出航の翌日、予期通り1機のコンソリー双発爆撃機が飛来し、爆弾が投下された。逃げようがないので甲板上で見ていると、爆弾が隣を航行する僚船黒川丸を直撃し、瞬く間に舶先を上にして沈んでいった。幸いに我が海河丸は至近弾のみで、甲板に立つ私は海水を浴びただけだった。しかし、米軍は無傷の我が船を見過ごすわけはなかった。翌日の昼頃、見張り員の「雷跡！」の大声と同時に魚雷が命中し、轟音と共に私は甲板に叩きつけられた。身体を撫でまわし傷してないのを確かめるや、2発目の魚雷は必至と見て、何も考えず舷側から海へ飛び込んだ。行くも留まるも死だった。いざという時、あの手で死のうと筋書きを決めていたので少しも慌てなかった。私の度胸の良さは、こうした洗礼を受けてつくられたといえる。

私は太平洋のうねりのような波間に浮

かびながら、死ぬための力を温存しておこうと漂っていた。うねりの頂上に来た時だけ、同じように浮いている多くの兵士たちが見えた。ふと見ると、いつの間に来たのか、遠くに駆逐艦がカッターで救助作業をしているではないか。私は急ぎ泳いで行きカッターに引き揚げてもらった。せっかく考えた「あの世行き」の妙案を実行するチャンスを逃してしまった。この時の戦死者は35名にのぼった。

サイパンに到着したが、戦況我に利あらず、戦闘機隊は急違ペリリュー島に向け、夜間に空母千代田にて高速移動した。ペリリュー基地では、３月30日米機動部隊が来襲し、ラバウルに次ぐ凄まじい激撃戦を行った。衆寡敵せず戦闘機隊は全機未帰還、私たち地上員を含め２４６名戦死、ゼロ戦32機を失った。翌日、グアム・サイパン両基地よりゼロ戦52機が応援に来るも、全機南漠に散った。二日間の戦闘で防御力を失ったペリリュー島は、敵の上陸必至となり、私たちは上陸地点と思われる海浜に、航空爆弾を埋めて待った。私は、良い死に場所が与えられたと思った。

数知れぬほど死ぬ目に逢いながらも、よくぞ生きてこられた。もう年貢の納め時だと思った。夜明け前に上陸が始まるとみて、目を皿にして海上を睨んでいた。夜が白々と明けてきても、上陸してこなかった。来ないはずだ。我が戦闘機隊が後にしたサイパンが、今空襲中と知らされた。またも私は戦死の機会を失った。

１週間後上司から、隣のパラオ島から２式大艇（４発の水上飛行艇）で内地へ出発し、ゼロ戦32機を製作会社から受領して、フィリピン・セブ基地に輸送せよとの命令を受けた。上司は、ラバウル以来の、私の死を賭した不惜身命の働き視て、若輩の私に大役を託したに違いない。託された嬉しさと同時に、身の引き締まる思いがした。敵前上陸寸前のペリリュー島から内地へ帰国するとは、なんと俺は運の強い男かと思った。

翌日パラオを離水して、太平洋上を８時間程経た頃、「日本へ着いたぞー」の声に、眼下を見下ろすと、房総半島の西海岸を北上していた。良く見ると、ちらほら桜が咲いているではないか。途端に、どっと涙がこみあげてきて止まらなかった。生きて二度と見 ることはないと思っていた祖国の桜に感動した。

飛行機製作会社で、ゼロ戦32機を受領し、１式陸攻にて、台湾経由フィリピン・セブ基地に、無事空輸の大役を果した。ところが、私がペリリュー島を出た後、残りの隊員全部は大型客船ジョクジャ丸にてセブ島に向かったが、魚雷を受け沈没、生存者のみセブ基地に到着したという。私は内地へ出張し、２度目の沈没の難を免れた。

戦場は、この不惜身命の思いなしには、１日として生きていけない世界だった。

戦後、経営者にも不惜身命の覚悟が必要だと、京セラの稲盛和夫社長が述べている。私も戦時中と変わらぬ、不惜身命の体験がある。戦後、親子３人で24坪の工場から始めたが、油圧クレーン車を開発するや忽ち注文が殺到し、数倍の設備拡大を計画した。その多額の増設資金の融資を銀行に求めたが、応じてくれなかった。もし、この計画を達成しなければ私の将来はないと思い、自分が所有する僅かな土地・家屋・預金を担保に提供することを提案した。その裸一貫になる不惜身命の熱意が決め手となり、融資に応じてくれた。

不惜身命とは、悟りの境地を示し、「生死一如」の魂の世界である。かって戦場で、死を受け容れることができたのは、魂が心と身体を統御・支配できることを明らかに示している。即ち、何かのために命を投げ出したときにのみ、偉大な力が生まれたといえる。不惜身命とは、死に甲斐を求めたことが同時に生き甲斐になることである。諺にも「捨ててこそ浮かぶ 瀬もあれ」とあるが、捨てなければ得られない。無一物が、無尽蔵を生む。私の一生は不惜身命の歩みであったと振り返る。

第一次特別攻撃隊の特型格納筒５隻の戦いを考証する。

奥本　剛

多くの人は、特攻隊と言えば体当たりと答えるでしょう。これは「神風特別攻撃隊」の熾烈な戦闘をこれぞ特攻隊！と誤った戦後報道によるものです。

「特攻隊」とは略語であり、正式には「特別攻撃隊」です。

では、いつ特別攻撃隊と名付けられた部隊が初めて戦闘に参加したのか、レイテ沖海戦ではなく、真珠湾攻撃です。その部隊は、P基地と言われた秘密基地を根拠地に艦隊決戦のために整備されつつあった、特殊潜航艇甲標的部隊です。このたび、寄稿の機会をいただきましたので、第一次特別攻撃隊について書かせていただきます。

・横山艇（艇長横山正治中尉、艇付上田定二曹）

イ―16より真珠湾口の南南西２１２度７海里より、０時42分発進した横山艇は３ノットで進撃し、２時間20分後の３時２分頃真珠湾防潜網口に到達し、真珠湾に侵入したものと考えられる。その行動が作戦通りであれば、水道を北上しフォード島を右回りに戦艦列沖に待機、機動部隊の攻撃に呼応し、計画通り一次空襲と二次空襲の間に戦艦を雷撃したはずだが、実際に魚雷を発射したかは判っていない。夜、イ―16では方位測定は出来なかったが、横山艇が発信した特定周波数で“キラ”を１回を受信した。これを奇襲成功“キラキラキラ”の一部であると解釈され、奇襲攻撃に成功したと判断されたのである。しかし、その後の消息は不明であり、収容点に姿を現す事はなかった。

戦闘詳報では２時間あまり通信が行われ、最後は「ワレ航行不能」を受信したと書かれているが、これは佐々木半九特別攻撃隊指揮官による明らかな事実誇張である。２時間も通信するということは、２時間も浮上し続け無線マストを上げていなければ出来ない事である。イ―16石川幸太郎通信員の陣中日誌は“キラ”の記載が無く、日記を残した出羽元整備員によると

「浮上揚収点をゆく。受信感度あれども〇〇〇〇〇方位測定出来ず。キラ（トラ）感受す。」

と書かれているが、それ以外イ―16乗員の記録はない。

ハワイ、オアフ島沖で調査を進めていたハワイ大学海洋調査チームにより、２００９年までに人為的に３つのブロック別に分解された、特型格納筒が水深約４００ｍで発見され、２０１２年日本のＮＨＫとアメリカのワーウルフで日米共同調査が行われた。私も同行しハワイ大学の深海調査船Ｋ・０・Ｋで目的地まで行き潜水調査艇で潜り、この目で海底にある特型格納筒を確認した。射出筒前端には八の字型防潜網カッターがあったが、九七式酸素魚雷は２本ともない。セイルにはジャンピングワイヤの取り付け滑車があり、船尾にはシングルスクリューガード、空圧式舵が確認できたため、これを真珠湾攻撃に参加した特型格納筒であると結論した。

問題は、

１．これが横山艇であるか？

２．魚雷は発射されたのか？

の２点であるが、５隻の特型格納筒に外見状の違いがないため、外見からは判別することは出来ないが、横山艇には出羽整備員が横山艇だけに付けた、無線機電源スイッチを確認することである。これは、無線機への電流が弱いため直接蓄電池から電源を取るためのもので、無線機の前の壁に付けられていた。その結果、横山艇だけの電波が強く潜水艦が受信できたと考えられる。

しかし、潜水調査船からカメラを操縦室内に入れる事が出来ず、というよりそのような装備がなくスイッチの確認できず終わったが、操縦室後部ハッチが開いて

おり接眼部のレンズが光に反射し、特眼鏡が左45度程度を向いていた事は、この目で確認できた。

以上の事から、この特型格納筒が横山艇がどうかは何も物証が得られていない。

なお、調査後に調査船Ｋ・０・Ｋ船内で行われた会議で特潜会故植田一雄氏は、

「横山正治中尉は真珠湾に侵入する技量がなかった。」

と言う酒巻和男少尉の証言を紹介した。これが本当であれば、この特型格納筒は横山艇ではない事になり、また、彼らは功を急ぐあまり搭乗員の生還を出撃の条件としたに山本五十六連合艦隊司令長官を、騙して出撃した事にもなる。しかし、その後にこれまで発見された特型格納筒の消去法でいけば横山艇だとしか考えられないと、証言とは１８０度違う見解を示された。この消去法はこれまで発見されている４隻に誰が乗っていたか確定していれば成立するが、確定していない現状では成立しない。それは、これから４艇の解説を読んでいただければ、ご理解いただけると思います。

私個人的な見解では、物的証拠もないものを確定することは時期尚早であり、間違えば他人の墓に違う名前を書くことになるため、誰が乗った特型格納筒かどうかは、確実な物証が無い限り、断言する事には慎重になるべきだと考えている。

なお、九七式酸素魚雷の発射、未発射とも何の情報もない。アメリカの研究家パークス・スティーブンソン氏は、横山艇は戦艦に向け魚雷を発射したと主張したが、それを証明する証拠もない。私は引き揚げ後に魚雷を抜いたのではないか？と主張したが、どちらとも証拠もない。

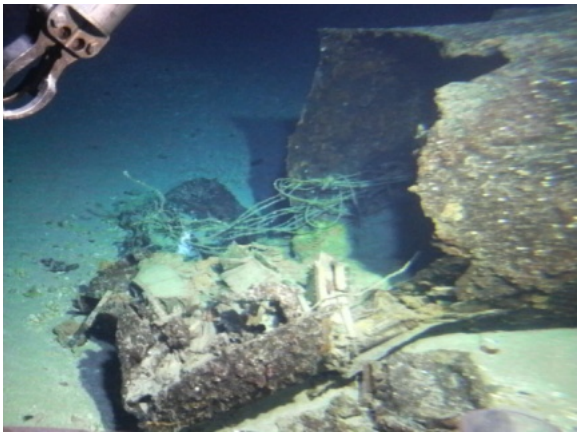
また、戦艦アリゾナの下から巨大な魚雷が発見されたというレポートもあるとパークス・スティーブンソン氏は言っていたが、九一式航空魚雷改二と九七式酸素魚雷は、空気か酸素の違いがあるだけで直径も同じ45㎝で大きさであり、全長は九一式が５．27ｍ、九七式が５．６ｍでありほとんど大きさは変わらない。変わるとしたら炸薬量の多い九七式酸素魚雷の弾頭が大きいというだけなので、巨大な魚雷という表現には当てはまらない。

また、引き揚げられたのであれば搭乗員の遺体も収容されたはずだが、それに関する記録も発見できておらず、謎に包まれたままである。（酒巻艇艇付き稲垣清二曹の遺体は現在埋葬地が判らなくなっている。）

調査中の魚雷発射管（著者撮影）

この特型格納筒の後部電池室が激しく損傷しており、損傷箇所からポッキリ折れていた。パークス・スティーブンソン氏は自爆したと主張したが、破壊痕を見る限りシドニーで引き揚げられた自爆した特型格納筒の破壊痕と比べ、内部からの爆発による花びら状の膨らみが一切なく、とは言え爆雷攻撃による外からの爆圧による変形もない。また、自爆時の大音響を米軍が聞いたという話もない。

これに関して気になる報告がある。それは、空襲中に真珠湾水道中央にあるワイオリオ半島で突如として泥が噴出し、対岸のコーリングドック付近に係留されていた駆逐艦が、これに対し砲撃したというものである。これがヒントになるのかもしれない。つまり、脱出しようとした



調査中の折れた後部電池室（著者撮影）

横山艇への、この砲撃が後部電池室に命中し撃沈されたのではないだろうか？と考えられなくもない。

全ては、引き揚げ後に行われた調査をまとめたレポートを発見することにかかっているが、未だに発見に至っていない。

ただ事実として確定出来ることは、真珠湾攻撃後に湾内は徹底的に調査が行われたが、湾外は調査が行われていないと言う事。つまり、この処分された特型格納筒が湾内で引き揚げられたものに間違いなく、真珠湾には２艇の特型格納筒が侵入に成功したということである。

・岩佐艇（艇長岩佐直治大尉・艇付佐々木直吉一曹）

イ―22は真珠湾口の南１７１度９海里より、１時16分発進させた。３時間後の４時16分頃、真珠湾内に侵入したものと考えられるが、その前３時42分に真珠湾口沖の哨戒区域で哨戒中の掃海艇コンコルドが潜望鏡を発見し、発煙筒２発を投下、続いて爆雷攻撃を行っている。

真珠湾に侵入したこの特型格納筒の行動は謎に満ちており、戦艦列の反対側のフォード島北水道に侵入。機動部隊の攻撃真っ最中の８時30分ごろ浮上し、８時35分その付近に停泊していた水上機母艦カーチスによって発見された。水上機母艦カーチスが駆逐艦モナハンに「敵潜水艦発見」の旗信号を掲げた。次の瞬間、特型格納筒から魚雷が水上機母艦カーチスめがけ発射されたが、この魚雷は外れ砂浜へ乗り上げ爆発してしまった。この魚雷発射による気泡を駆逐艦モナハンが前方１０００ｍに魚雷発射した特型格納筒を発見。特型格納筒も駆逐艦モナハンを発見。直ちに回頭し駆逐艦モナハンに向け魚雷を発射するも、これも外れてしまう。なお、駆逐艦モナハンとの一騎打ちの最中に、水上機母艦カーチスが放った５インチ砲弾が特型格納筒のセイル後部に命中したが、砲弾は爆発せずに反対舷へ薄い鉄板を貫通しただけで被害はなかった。

８時43分直進してきた駆逐艦モナハンが特型格納筒に激突、爆雷４発を投下した。引き揚げられた岩佐艇の前部電池室の状況を見る限り、前部電池室が激しく破壊されているが、自爆用爆薬を爆発ではいない。と言うのも、シドニーで自爆した中馬艇を見ると、爆薬が前部電池室後端付近の床に置かれていたため、前部電池室は下から膨れ割れている。しかし、特型格納筒は上から割れているのである。この状況を検証すると、駆逐艦モナハンに体当たりされ艦首により切り裂かれた前部電池室に、投下した爆雷１発が偶然に入り爆発したものと考えられる。破壊状況を見る限り、自爆用爆薬よりも前部電池室の被害が大きく、セイルも後ろへ傾いているため、爆雷によるものと考えるのが妥当だろう。また、残り３発の爆雷は前部電池室右舷、電動機付近の左右で爆発している事は、写真の圧壊状態から判断できる。この爆雷の爆発により発射管室が外れてしまったようだ。引き上げ後の写真には発射管室がなく、引き揚げられてもいないようである。

体当たり後の駆逐艦モナハンは後進をかけたが止まりきらず、勢いそのままにワイオリオ半島に座礁してしまったが、まもなく離礁に成功した。

なお、この特型格納筒が岩佐艇だと言わ

引き上げられた岩佐艇？

れる所以は、撃沈されたその海面に大尉肩章が浮いており回収された事である。しかし、水上機母艦カーチスに体当たりした九九艦爆のパイロットも大尉であったことで、このパイロットのものではないかという説もある。

しかし、沈む特型格納筒から肩章だけが外へ出る可能性はあるのだろうか？

真珠湾攻撃が終わり、早い時期に特型格納筒は引き揚げられた。しかし損傷がひどく、完全な状態の酒巻艇があったこともあり、調査も行われず、操縦室内の搭乗員の遺体も危険だからという理由で誰かも確認も回収もせず、そのままの状態で潜水艦桟橋の改修工事で桟橋内に埋められてしまった。それから年月が経ち、数年前潜水艦桟橋の改修工事が再び行われたとき、ショベルカーが誤って岩佐艇の後部電池室の外板を破壊。中に充満していた有毒ガスが噴出し、大騒ぎになるという事件が起こった。その後、どうなったのか続報がないが再び埋められてしまったものと思われる。

なお、空襲中に真珠湾水道コーリングドック沖で外へ向け動く潜望鏡と、中へ入ろうとする潜望鏡がすれ違うのが目撃されたという報告があり、アメリカの研究家パークス・スティーブンソン氏はこれが攻撃後に脱出する横山艇と、侵入する岩佐艇だと推測したが、空襲中の錯乱状態で縦に浮いた棒を潜望鏡と誤認した可能性もあり、真実は謎のままである。

・古野艇（艇長古野繁實中尉・艇付横山薫範一曹）

イ―18は南南東１５０度12・６海里より、２時15分発進させた。これは、５隻中もっとも真珠湾口から離れた位置からの発進である。直進すれば４時間20分後の６時35分に真珠湾口に到達、湾内へ侵入する予定であった。

６時30分、備品補給船アンタレスがバージを曳航し真珠湾へ入港しようとしていた。そのバージの右後方１４００ｍに浮上航行する特型格納筒を発見、哨戒機が上空を旋回しつつ発煙筒２発投下。補給船アンタレスは、防潜網端沖で停船し状況を見守った。

同海域で哨戒任務に就いていた駆逐艦ウォードは、補給船アンタレスからの報告で特型格納筒を発見。４時43分から戦闘配置に付いていたため、直ちに１番砲が狙いを定め発砲。しかし、特型格納筒の遙か向こうへ弾着し水柱を上げた。続いて３番砲が狙いを定め発砲。この１発がセイル中央に命中。と、同時に特型格納筒が潜航を開始したため、直ちに爆雷４発を浅深度設定で投下。この攻撃後、この特型格納筒は姿を現さず撃沈したものと判断された。駆逐艦ウォードは直ちに第14海軍区司令官に国籍不明潜水艦撃沈を報告、第14海軍区司令官は直ちに駆逐艦モナハンに緊急出動を命じた。

第２哨戒中隊指揮官は、太平洋艦隊司令部当直参謀へ潜水艦撃沈を報告したが、警報が発せられる事もなく、警戒レベルも上げられる事もなくうやむやにされてしまったのである。もし、この事で警戒レベルを上げていれば、機動部隊の攻撃隊は強烈な反撃を受けただろう。この事実は、真珠湾陰謀説の１つの要因であると語られている。

２００２年、オアフ島真珠湾口沖で海底調査を行っていたハワイ大学が、水深約４００ｍの海底で偶然１隻の特型格納筒を発見した。それはほぼ完全な状態で沈んでいた。調査によりセイル左舷中央に砲弾命中痕が認められた。この発見時の模様は、ハワイ大学海洋調査チームがＹｏｕＴｕｂｅｒで動画を公開されているのでご覧にただいきたい。

https://www.youtube.com/watch?v=kVR5B2X-wys

古野艇と言われる特潜（HURLSubOpsより）

これが駆逐艦ウォードが撃沈を主張したものであった。実は、駆逐艦ウォードの戦果はそれまで未確定のままだったのだ。この発見により駆逐艦ウォードの戦果は確定され、特型格納筒撃沈は真実と認定されたのである。

以上の状況証拠から、特潜会故植田一雄氏はこの特型格納筒が古野艇だと主張したため、現在はそれが定説になっている。確かに発進時間に予定航走時間を足すと６時35分に真珠湾口になるため、状況的には合っているとも言える。しかし、ハワイ大学の調査では外側は徹底的に行われたが、艇内の調査は行われず、というより水深４００ｍもの深海で操縦室内を調査する術もなく、艇内はどうなっているのか、何か搭乗員の遺品、遺骨が残っているのかなど、全く不明のまま今日まで至っている。唯一、誤って潜水調査船を前部電池室右舷にぶつけてしまい、小さな孔を開けた以外は、艇内を見ることは出来ない。

よって、物的証拠は何一つ発見できるわけもなく、状況証拠のみで古野艇と言われているに過ぎないのである。腐食の進行により八の字型防潜網カッターが崩壊し海底に落ちてしまった。現在はその状態で海底に眠っている。

・広尾艇（艇長広尾彰少尉・艇付片山義雄二曹）

イ―20は南南東１５１度５．３海里より、２時57分に発進した、と言われているが戦闘詳報に付けられたイ―20の行動図を見ると不可解な行動を取っている事から、予定通り発進できなかったのではないかと考えられる。行動図には、筒発進２２３０／７と書かれた地点から、３６０度旋回を行い、少し北上すると再び３６０度旋回。さらに北上したが湾口に近づきすぎたために、駆逐艦に発見され爆雷攻撃が始まった。そして、３時47分に３回目の爆雷攻撃を受けてから、今度は１８０度反転し南西へ離脱を図ったが、７時50分までにさらに４回の爆雷攻撃を受け、下士官１名が戦死する被害を受けている。通常、爆雷攻撃を受ける潜水艦は、深く潜り無音航行で敵をやり過ごすため、この激しい動きは尋常でない事が分かる。この行動図を見る限り、考えられる事は架台膠着の発生である。架台膠着とは、船体に塗られたペンキが完全乾燥していない状態で潜水艦の架台に搭載されたことで、船体重量で圧着された状態でペンキが固まり、接着剤のような作用をするために発生する現象である。なお、架台と船体が錆びてくっついたと言う方もいるが、架台の上面には板が貼られ、搭載する度にカンナで削り形を整える。つまり、板は錆びないのでくっつきようがなく、また短期間でそんなに錆びる低品質の鋼鉄を使うわけもないので、あり得ない話である。また、この架台膠着は潜水艦搭載のカッターや、後の人間魚雷回天で度々発生し、戦闘に悪影響を与えるが改善されず終戦まで続くのであ

る。

架台膠着により、広尾艇は計画より約半分の距離まで接近し発進したものと考えられるが、爆雷攻撃を受ける中、遠心力により剥がれたが、イ―20も自艦の位置も正確に把握することが出来ない状態であり、広尾艇もどこで発進したのか分からない状態で真珠湾を目指したと考えられる。

発進後、位置確認のために特眼鏡を上げた広尾艇を待っていたのは、イ―20を制圧攻撃中の駆逐艦であった。発見された広尾艇は、酒巻艇と同様に執拗な制圧攻撃を受けては一端下がり、再び突入するという事を繰り返したと考えられる。その制圧攻撃で操縦室前部直下で爆発した爆雷により穴が開き、搭乗員も傷ついたものと考えられる。しかし、驚くべきは人が1人が優に通れるほどの大穴が開き激しく浸水する特型格納筒を、沈没する前に浅瀬へ全速で向かわせたことである。発見時ハッチが開いていたため、浅瀬で搭乗員は脱出した可能性が高いが、生きてオアフ島に上陸したかどうかは判らない。

１９６０年6月13日、ダイビング訓練中だった米海軍兵が、この特型格納筒を偶然発見した。その後潜水調査が行われ、これが真珠湾攻撃に参加した特型格納筒だと判断され、１９６０年7月28日に米海軍によって引き揚げられた。九七式酸素魚雷は未発射のまま発射管に残されており、操縦室の下には大穴が開いている事が確認され、またセイルのハッチが開いていた。引き揚げられた後の調査で、中からは搭乗員の服が発見されたが遺骨はなかった。残されたブーツのサイズが広尾彰少尉の足のサイズと同じだったため、この特型格納筒は広尾艇と言われるようになったのである。また、発射管室は危険物として切り離され、深海へ海没処分された。

引き揚げられた広尾艇（NHHCより）

１９６１年日本に返還される事になり、真珠湾に派遣された海上自衛隊揚陸艦しれとこに、赤さびた広尾艇が積載され横須賀へ帰港。引き揚げられて1年後江田島の第一術科学校に到着した。その後、前部電池室から蓄電池と気蓄器が撤去され、電池室を切り離し、操縦室前後の隔壁は無残にガス溶断され、操縦室内の機器と後部電池室の蓄電池、６００馬力電動機など一切の内部機器が取り外された。海没処分された発射管室は、ＩＨＩ石川島播磨造船によって復元、船体は防錆処理が行われた後に、全てのブロックが接

操縦室前部に開いた穴（NHHCより）

合され、在りし日の姿を取り戻した。しかし、船体の塩抜きが完全ではなく腐食を止めることが出来ず、全体をＦＲＰで覆う工事が行われ、ハッチロには鉄板が溶接され、風雨から船体を守る処置が行われた。長らく船体は黒で塗装されていたが、２０１６年に軍艦色に塗り替えられた。これについて、軍艦色であるという資料があったのかは不明である。なお、スクリュープロペラが金色に塗られているが、真鍮製ではなく鋼製なので金色は間違いである。これは真珠湾のサブマリンミュージアムに展示されていた、酒巻艇のプロペラに職員にお願いし磁石をくっつけてもらい確認したので間違いない。

・酒巻艇（艇長酒巻和男少尉・艇付稲村清二曹）

イ―24は西南西２０２度10・５海里より、３時33分に発進した。３時間半後には真珠湾口へ到達する予定であったが、多くの方がご存じの通りジャイロコンパスが故障したまま発進。自艇の針路が判らず、たえず潜望鏡観測をしながら真珠湾に向かったが、真珠湾口沖に設定された哨戒区域で、駆逐艦に発見され執拗な制圧攻撃を受けながらも、挫けず何度も真珠湾侵入を図ったが、何度も座礁したことで防潜網カッターが変形し、魚雷発射管の蓋を覆ったために魚雷が発射不能となり、また度重なる攻撃により蓄電池からの有毒ガスの発生するなど、艇内が劣悪なる環境になるも真珠湾突入を諦める事のない酒巻和男少尉だったが、状況を冷静に判断した稲村二曹が、次に行われるであろうシンガポール攻撃に参加しましょうと酒巻和男少尉を説得、真珠湾侵入を断念し母潜水艦の待つ、ラナイ島沖の会合点に向け舵をとったのである。

その後、疲労困憊の二人は深い眠りに落ちてしまった。そのため、縦舵が少し左へ切られ、酒巻艇は収容配備点に向かわず徐々に左へ円を描くように進み、オアフ島南西端をぐるっと回りワイマナロ浜に座礁してしまったのである。座礁の衝撃で目が覚めた二人は必死に離礁を試みたが、酒巻艇は動かず二人は相談の上、筒を爆破し脱出する事にした。前部電池室にある50Kg爆薬の導火線に火を着け、酒巻和男少尉と稲村清二曹は海に飛び込んだ。波浪が高い海で二人は名前を呼び合いながら浜を目指したが、二人とも波に飲まれ引き離され、互いを確認できない状態になり、波に飲まれ意識を失ってしまったのである。翌朝、哨戒任務で海岸を警戒中だった２人の米兵が、座礁している酒巻艇を発見。そしてその近くの海岸に倒れている酒巻和男少尉を発見した。動かしてみると意識があったため捕虜としたのである。その後、尋問の最中に死を望む酒巻和男少尉を説得し、情報を聞き出そうと米軍は努力した。後に酒巻和男少尉は収容所で支給された新聞により、自分の艇が爆破に失敗し米軍に鹵獲された事を知り激しく後悔することになる。酒巻和男少尉は終戦まで収容所で捕虜のまとめ役として過ごし、捕虜返還事業でようやく帰国した。しかし、それを知った人から心ない中傷の手紙が送られてくる毎日を過ごしていたが、それ

座礁し発見された酒巻艇

に耐えきれずブラジルへ渡り、後にブラジルトヨタの社長まで上り詰めた。ただ、ブラジルへ渡る前に、かつての艇付である稲村清二曹の実家を訪れ仏壇に手を合わせたものの、自分が一緒に出撃した艇長であるとは母親に言えず帰り道で号泣。また、昭和21年5月にはかつて九軍神と共に訓練し、宿舎としていた愛媛県三机の岩宮旅館にも訪れている。

なお、稲村清二曹は遺体となって浜に打ち上げられたところを発見され検視後、埋葬されたと言われるが、現在その埋葬場所は判らなくなっている。

以上のように、発見された5艇の特型格納筒で、上記の通り確実に誰が乗っていた物か判っているのは酒巻艇だけである。広尾艇も物証から確実と考えてもいい。しかし、残り3隻は物証の発見に至っておらず、確定に至らないのが現状である。岩佐艇はどちらとも言えず、状況証拠だけで言えば古野艇も確実になるが、果たしてそれだけで確定していいものか、熟考するべきだろうと私個人としては考えている。判断を誤れば他人の墓に他人の名を刻む事になるからである。

潜水艦による収容捜索

12月7日17時から23時まで、第一収容配備点（ラナイ島西方海域）において、母潜水艦は浮上し特型格納筒の発見に努めたが発見できず、黎明前には一部の潜水艦によりラナイ島西岸の探索も行われたが、この日は未発見に終わったのである。

8日、夜間第二収容配備点（2隻ライナ島西方海域、3隻ライナ島南方海域）で捜索するも、1隻も特型格納筒を発見できず。しかし、イ―16は捜索中に横山艇か“キラ”を受信したのだが、方位は測定できなかった。この件について、戦闘詳報ではその後2時間も通信があったが「ワレ行動不能」の後、通信が途絶えたとある。しかし、これは上記の通り話を盛っている。その理由に

第一に、イ―16の通信室いた中で、石川幸太郎元通信士の日誌に“キラ”さえ書かれておらず、出羽整備員の日誌にだけ書かれている事なのである。

第二に2時間も無線送信すると言う事は、横山艇は真珠湾内で2時間も浮上し無線マストを上げていたという事になる。そのようなことは状況からありえないからである。

9日は、イ―22が第二収容配備点、イ―16が第一収容配備点で捜索するも手がかりは見つからなかった。10日も、9日と同じ要領で捜索したが発見に至らず、ついに捜索は打ち切られる事になり、5隻の母潜はグリエゼン環礁へ帰投することになったのである。その後、唯一特型格納筒と通信に成功したイ―16が呉へ帰投が命じられ、今後の甲標的作戦のために訓練に協力することになったが、乗員は他の潜水艦のように敵艦を撃沈出来ない事に不満を持っていたという。

特型格納筒が全て未帰還であった事に、以下のような推測がなされた。

1．筒は性能上、魚雷発射と同時に司令塔を水面に露出するため、攻撃時に敵に発見された。結果、港湾口を閉鎖された公算がある。

2．開戦以後、真珠湾前面の敵の警戒制圧が極めて激しく日中爆雷音絶えず。筒は脱出に際し、又は脱出直後敵の爆雷攻撃を受けた。

3．筒の攻撃は、空襲第一撃と第二撃の間に実施する計画であったが、味方の爆弾により損傷したのかもしれない。

4．脱出したものの、波浪あるいは電池消耗のため帰還できなかったのかもしれない。

5．ジャイロコンパスの故障が多かった点も、一部の筒がこれが原因かもしれない。

そして、特型格納筒の局地奇襲作戦に

使用する場合、特型格納筒の性能については以下の点を特に考慮を要するとされた。

１．持久力（航続距離）の増大を図る。この点は、洋上戦闘に使用する甲標的とは根本的に計画を変える。

２．狭い湾内における操船を容易にするため、操縦性の改善を急務とし旋回圏をいっそう縮小すると共に、後進力を増加する。

３．防潜網カッターの廃止。

この特型格納筒による戦果は、真珠湾から上がる火柱が相次ぎ潜水艦から目撃され、「少なくとも敵戦艦を１隻以上撃沈したことは確実である。」とされたが、それを確認する術はなかった。後に空母航空隊に戦艦アリゾナ撃沈は、特別攻撃隊の戦果にして欲しいと要請したことは有名である。

大本営が真珠湾攻撃で特殊潜航艇を使用した事を、以下のように発表した。

12月18日午後３時発表

１．ハワイ界線の戦果に関しては、確報接受の都度発表しありたるところ、攻撃実施部隊の目撃並びに攻撃後の写真偵察等にいたり、以下の通りの総合戦果を挙げ米太平洋艦隊並びにハワイ方面敵航空兵力を全滅せしたること判明せり

（１）撃沈

戦艦５隻（カリフォルニア型１隻、メリーランド型１隻、アリゾナ型１隻、ユタ型１隻、艦型不明１隻）

甲巡又は乙巡２隻、給油艦１隻

（２）大破

戦艦３隻（カリフォルニア型１隻、メリーランド型１隻、ネバダ型１隻）

軽巡２隻、駆逐艦２隻

（３）中破

戦艦１隻（ネバダ型１隻）

乙巡４隻

（４）敵陸海軍航空兵力に与える被害

銃爆撃により炎上せしめたるもの約４５０機、撃墜せるもの14機

その他、撃破せるもの多数、格納庫16棟を炎上せしめ２棟を破壊す。

２．同海戦において特殊潜航艇をもって編成せる我が特別攻撃隊は、警戒厳重を極むる真珠湾内に決死突入し、味方航空隊の猛攻と同時に敵主力を強襲、あるいは単独夜襲を決行し少なくとも前記戦艦アリゾナ型１隻を轟沈したるほか、大なる戦果を挙げ敵艦隊を震撼せり。

３．我方の被害飛行機29機、未だ帰還せざる特殊潜航艇５隻。

報道により、特殊潜航艇が使われたことを知った第一次試作艇開発責任者岸本鹿子治少将は、艦政本部に怒鳴り込んだ。

「真珠湾攻撃に参加した特殊潜航艇は、俺の上申した三案のどれだ！」

と水雷兵器担当者に詰め寄った。すると担当者は

「三案もあったのですか？」

と、とぼけた返答をしたため

「バカモン！貴様、ツラでも洗ってこい！」

と怒鳴り飛ばし、次に先任部員の岡部三四二大佐を呼び出し、

「金庫を開けて調べてみろ！」

と、金庫から分厚い機密書類を持ってこさせ

「これのどれだ？」

と問いただ出した。すると

「確か、これのようですが・・・」

と岡部先任部員が示したのは電池推進の特殊潜航艇であった。

「これは二次電池だけの対潜爆撃標的ではないか。」

すると

「はぁ、そうであります。」

となんとも頼りない返事を返す岡部先任部員を後に、話にならんと本部長室へ行き岩村清一中将に話を聞くと、岩村清一中将も三案あったことを知らなかったのだ。この事に岸本鹿子治少将は呆れかえり、肩を落とし夜行列車で帰路に就いたのである。

第二次試作艇開発責任者小山貞中佐は

「なんて無茶なことをしたんだ。」

と落胆した。
呉海軍工廠魚雷実験部大野機静雄少将は「初めから港湾奇襲兵器というのであれば、外に設計の仕方もあったのに。」と語ったという。
甲標的は敵主力艦隊を洋上襲撃のために開発した兵器であり、本来母艦から発進すると高速で敵主力艦隊に接近し雷撃する、言わば短期決戦兵器である。それ故に操縦性能は小回りも出来ない。いや、太平洋では小回り性能など必要ない。つまり港湾襲撃など一切考慮していない兵器であった。故に全艇未帰還は当然の結果だったのかもしれない。搭乗員もその事を判っており、次の作戦のための特型格納筒改善要求書を提出していた。
昭和17年4月8日、九軍神合同海軍葬儀が盛大に行われた。岩宮旅館の三姉妹は10人のはずなのに九軍神なのはおかしい、酒巻さんがいない！と思ったが、その事を口外することは無かった。

感　状

昭和16年12月8日海戦冒頭挺身敵米国太平洋艦隊主力をハワイ軍港に襲撃し、友軍飛行機と呼応して多大の戦果を挙げ、帝国海軍軍人の忠烈を克く中外に宣揚し全軍の指揮を顕揚しよってここに感状を授与す。
昭和17年2月11日

連合艦隊司令長官　山本五十六

この後、昭和17年3月6日、海軍省より九軍神には二階級進級が発表された。
最後に、一つ問題提起をします。
三机の大東亜戦争九軍神慰霊碑を後生に伝えようとする団体が、九軍神は死ぬために訓練をしたという漫画を作り配布しています。しかし、山本五十六連合艦隊司令長官は生還を条件に出撃を許可しています。これには私はこの漫画を配布している団体に抗議しましたが、特攻隊だから必ず死ぬという考えは間違っています。特殊潜航艇甲標的部隊は、大戦末期に甲標的丁型蛟龍となって嵐部隊部隊に編入されても、最後まで魚雷による反復攻撃を行う決死部隊でした。特攻隊には必死の部隊と決死の部隊があった事は、ちゃんと区別し伝えていくべきでしょう。

奥本　剛

九軍神の肖像画（ＮＨＨＣより）

※奥本剛氏の略歴及び主な著書
昭和47年生まれ。平成4年3月国立波方海技短期大学校卒業。同年4月フェリー会社入社。平成21年3月ハワイ沖日米合同特殊潜航艇調査に参加
主な著書
・図説　帝国海軍特殊潜航艇全史
・呉・江田島・広島戦争遺跡ガイドブック
・図解・八八艦隊の主力艦
・日本陸軍の船艇―上陸用、輸送用、護衛用、攻撃用各船艇から特殊船まで
・日本陸軍の航空母艦：舟艇母船から護衛空母まで
・陸海軍水上特攻部隊全史―マルレと震洋、開発と戦いの記録

（編集長記）

連載山ある記23　長野県「湯ノ丸山」

会員　池田　康博

湯ノ丸山は、群馬と長野の県境稜線上に位置する山である。6月下旬、群馬側から登ろうと計画し、鹿沢温泉の宿をナビで検索すると、小諸ＩＣから国道94号、東部嬬恋線の経路が最適と表示した。これは湯ノ丸スキー場がある地蔵峠を越えて降りるルートであり、止む無く？標高千七百三十二ｍの地蔵峠から登ることにした。

8時55分に駐車場を出発。登山口であるスキー場のゲレンデを直登する。リフトで上がる登山客を横目にせっせと登って、9時17分にリフトの終点に着いた。ここがツツジ平で、湯ノ丸山への登りが始まる「鐘分岐」まで平坦な道が続いている。道の右手一帯は湯ノ丸牧場であるが、レンゲツツジの群生地でもあり、登山者も自由に入れる。入ってみると乳牛など数頭が我々を気にする様子もなく木陰でのんびり憩っていた。

登山道のツツジ

ツツジを見ながら湯ノ丸高原をゆっくり歩いて鐘分岐に着いたのが9時39分、設置してある鐘を鳴らして登り始めた。登山道はほゞ直登であるが、斜面に咲くツツジやシャクナゲなど高山植物を楽しみながら10時20分に登頂。標高二千百一ｍ、山頂は広く、全面を石に覆われていて、三百六十度の展望である。北を見ると、稜線上の目と鼻の先に小ピークがあり、頂上は巨岩を積み上げたような姿をしている。地図上に名前はなく標高のみが記されてあるので、そこまで足を延ばすことにした。このピークに10時35分着、標高は二千九十九ｍ、岩の上に立ってしばらく周囲を見渡した後、再び戻って昼食とした。山を降りてから案内板を見たところ、この小ピークが湯ノ丸山の北峰で、主峰は南峰ということだった。

湯ノ丸山（向かいは烏帽子岳）

11時20分に下山開始、鐘分岐まで下ったところで、湯の丸高原キャンプ場近くの、臼窪湿原を見て帰ろうと右折し、10分程歩くと、地蔵峠から烏帽子岳に向かう道と交差する中分岐に着く。ここを横切ってきれいな森の中へ入った。目印の赤いリボンを確認しながら静かな山道をどんどん歩き、12時20分に臼窪湿原に到着。森に囲まれた静かな湿原の木道を一周して地蔵峠に向かい、12時40分に駐車場に着いて鹿沢温泉に向かった。

余談ながら、鹿沢温泉のひなびた宿、「紅葉館」の脇に百番観音が祀ってある。江戸の昔、この温泉の湯治客が、紅葉館までの湯道（現在の東部嬬恋線）に、一町毎に観音像を置いたという。なんともこの温泉の有難味が増す話ではある。因みに登山口は81番観音であった。また、すぐ近くには〝雪山賛歌の碑もある。西堀榮三郎氏が紅葉館宿泊時に作詞にしたものだという。（令和４年６月27日）

百番観音

顕彰譜（11）

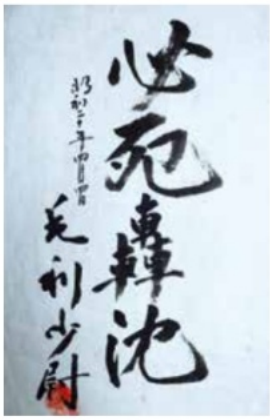
会報１３４号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第十一回目です。

陸軍航空

加古川飛行場に係わる特攻碑

加古川に飛来し中村屋に宿泊した特攻隊員が、書いた遺墨や写真が多数残っていたが、現在は鶴林寺に展示されている。

鶴林寺は聖徳太子御創建の由緒ある寺で、数多くの国宝や文化財があり、住職の尽力により特攻隊員の遺墨等も寺宝として保存されている。



建碑の由来

加古川には第一教育飛行隊があり、ここで訓練をうけた特攻隊員が少なくないし、また南に向かう特攻機の中継基地にもなっていた。それらの人々は陸軍指定旅館中村屋に宿泊したので、中村屋の主人宮田亀之助氏が、この碑を旅館前に建ててあったが、末永く供養するため地元関係者と県少年飛行兵会とが全国より浄財を得て、鶴林寺に移設した。

所在地　兵庫県加古川市加古川町 北在家鶴林寺内

移設建立　平成13年5月26日

建立者　特別攻撃隊慰霊碑建立委員会

兵庫県陸軍少年飛行兵会

写真提供　鶴林寺

（陸軍航空士官学校記念碑）
航空兵の像

修武台記念館２階には国内唯一と言われる現存の桜花を始め、神雷部隊、義烈空挺隊、富嶽隊、陸軍少年飛行兵や当時の飛行服等が展示されている。

航空士官校を巣立った者は51期から58までの士官候補生と、19期から24期までの少尉候補者並びに1期から4期までの将校学生である。

特攻隊として国に殉じた者の数は、座間の士官学校を卒業して航空に転科した者もあるので、正確な数は掴み得ないが、約一二〇柱と推定される。

碑　文

陸軍航空士官学校は昭和十三年この地に創設され昭和二十年大東亜戦争終結と共に閉校となった

短い歴史ではあったが我が国近代航空の発展に輝かしい足跡を残してその使命を果した

この像はエンジンを背に大空を仰ぐ航空兵の像であり、空地一体の姿を表現したものである

かつて愛国の至情に燃えてこゝ修武台に集い修練に励んだ若人たちが　朝夕その勇姿に接して無言の感化を受けた空の神兵像

今ここに四十年の歳月を経て復元した

願わくは陸軍航空士官学校の歴史として後世に語り継がれんことを

昭和六十一年九月七日

航空兵の像建立賛同有志　建之

所在地　埼玉県狭山市稲荷山航空自衛隊入間基地内

かつて航空士官学校の学校本部を模した建物が「修武台記念館」となり、その前庭に航空兵の像が建っている。

復　元　昭和61年9月7日

陸軍航空

荒鷲之碑
（熊谷陸軍飛行学校）

昭和10年この地に熊谷陸軍飛行学校が創設された。それ以来、万を数える若鷲が巣立っていった。

終戦によって熊校の歴史は閉じたが、散華した若鷲の霊を慰めその勲を顕彰し、史実を永く後世に伝えるため、生き残った者が集まってこの碑を建てた。

合祀者は熊谷陸軍飛行学校職員、軍属、同校出身の将校、下士官、依托学生、少年飛行兵、特別操縦見習士官の各戦没者計二二一二柱で、その中には多くの特攻戦死者が含まれているが、その数はさだかでない。

特攻勇士の辞世

熊飛校（くまこう）の校庭（にわ）に咲いたる若桜
散りて甲斐ある生命（いのち）なりせば

熊谷基地教育参考館
旧本部庁舎階段等の陸軍飛行学校等の資料が展示されている。

所在地　埼玉県熊谷市拾六間
航空自衛隊熊谷基地内（元熊谷陸軍飛行学校跡）

建　立　昭和50年5月5日

第十回
戦歿学徒慰霊祭

先の大戦に於いて、多くの学徒が学業半ばにして国難に立ち向かいました。

尊い一命を祖国のために捧げられた英霊のご遺徳を偲び、感謝と尊崇の念をもってこの広島の地で慰霊祭を斎行いたします。

慰霊祭後、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会評議員であり産経新聞社編集委員の宮本雅史氏による講演を行います。講演会場ではご祭神のパネル展示も行っております。あわせてご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時：令和５年９月３日（日）13時～

場所：広島護國神社　参加費：一般 ２，０００円　学生 無料

講演：『戦後78年、日本人が忘れたもの』

講師：公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会評議員
産経新聞社編集局編集委員　宮本 雅史（まさふみ） 氏

時間：14時～16時　場所：広島護國神社 瀬戸の間

講師プロフィール

昭和２８年、和歌山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、産経新聞社に入社。平成２年、米国・ハーバード大学国際問題研究所に訪問研究員として留学。平成５年、ゼネコン汚職事件のスクープで日本新聞協会賞を受賞。司法記者クラブキャップ、警視庁記者クラブキャップ、東京本社社会部次長、バンコク支局長などを経て一時退社。その後、書籍編集者、フリージャーナリストを経て、産経新聞社に復社。社会部編集委員、那覇支局長を経て現在は産経新聞社編集局編集委員。「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」評議員。琉球空手、古武道、秘武術の「本部御殿手真武会宮本道場」を主宰。

主な著書に、『「特攻」と遺族の戦後』『海の特攻「回天」』（以上角川ソフィア文庫）『報道されない沖縄』『少年兵はなぜ故郷に火を放ったのか』『領土消失』（以上ＫＡＤＯＫＡＷＡ）『国難の商人　白石正一郎の明治維新』（産経新聞出版）など。

お申し込み・お問い合わせ

メール　h.ireisai@gmail.com

電話　090-7896-4830（実行委委員長 久保）

お申し込み締切　令和５年８月21日（月）

主催：戦歿学徒慰霊祭実行委員会

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

● 電気代　請求書見て　汗が引く
● 脱マスク　買い置き分が　山作る

ネコ

● 崖に坐し　テント真向い　あけび食む
● 秋ひとり　寂しき影の　塔婆かな
● 暮れる秋　そっと掌（て）の水　母の土墓（はか）
● 奥津城（おくつき）　去れば戻らす　片割月

松花江

● 青空に　笑顔残せし　征く君の
想いよとどけ　永久（とこしえ）に

淳　子

事務局からの報告等

一　第七十二回特攻平和観音年次法要の斎行について

恒例の特攻平和観音年次法要が令和五年九月二十三日（土曜・秋分の日）の午後2時から世田谷山観音寺特攻観音堂において、駒繋神社との神仏習合により斎行されます。

この年次法要の詳細に関しましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、会員以外の方も多くの皆様方、お誘い合わせの上、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

なお、本年次法要に参列を希望される方は、同封の「郵便払込取扱票」の出席欄に○印を付し、お布施（一名分三千円）をお払込みください。

知人等同伴される場合は、同伴者のお名前もご記入ください。

二　「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。同封のチラシのとおり、来年のカレンダーはリニューアルしたものとなっています。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。

ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

三　月例法要について

毎月18日14時より世田谷山観音寺の特攻観音堂において執行されている月例法要は、コロナ禍のため一時中断されていましたが、鎮静化に伴い、以前のように斎行されています。

しかしながら、まだご存じで無い方が多いようで、参列者が少ない状況です。

多数の方のご参列をお願い致します。

四　会報記事の訂正について

会報一四五号（令和5年5月号）

42頁上段写真の解説

誤　難台山頂への標識

正　難台山頂の標識

42頁中段4行目

誤　平成21年2月19日、

正　削　除

寄付者御芳名（敬称略）

（令和5年4月1日～6月30日）

（単位千円）

一二　上西　幸子

一〇　知覧特攻慰霊顕彰会

一〇　森山　正義

一〇　浮世　喜昭

一〇　廣川　恭子

五　内山　直子

五　早瀬　登

三　十川　重次郎

二　飯田　美絵

二　青池　正夫

二　城ヶ端　専

二　小野　好永

二　中村　弘庸

二　波部　修三

一　山下　博

新入会員名簿（敬称略）

（令和5年4月1日～6月30日）

千　葉　岩浅　博之

東　京　小林　大地

本多　賢也

新　潟　君和田　征美

大　阪　山根　典子

木村　圭作

福　岡　川端　幸夫

会員訃報（敬称略）

ご冥福をお祈りします。

北海道　廣田　正（5・1・11）

神奈川　和才　誠（5・2）

生田　瑛（5・3・9）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:https://tokkotai.or.jp

ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会員以外の方の投稿も歓迎致します。

6、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５－７
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　jimukyoku@tokkotai.or.jp